

清武町埋蔵文化財調査報告書 第3集

角 上 原 遺 跡 群  
TUNO GAMI BARU

田代堀第1遺跡  
TA SIRO BORI

上ノ原遺跡  
UE NO HARU

平成元年三月

清武町教育委員会



上段 中国陶磁器(青磁・染付)

下段 肥前系陶磁器(染付)

## 序

角上原の遺跡は、宮崎学園都市遺跡群と連なる河岸段丘に位置しており、兼ねてより埋蔵文化財包蔵地として考えられていましたが、此の度県営圃場整備事業を行うにあたり、これを発掘調査し、その記録保存するために清武町教育委員会が遺跡の調査をしたものであります。

発掘調査では、古墳時代、中近世の住居跡や遺構、縄文土器等が検出されており、この報告書が、今後本町古代の歴史を繙く資料となることと思います。

この調査にあたりご協力いただきました県教育委員会文化課とその他機関の方々、地元地権者の方々に謝意を表し序文といたします。

平成元年 3 月

清武教育委員会

教育長 黒崎 改 司

## 例 言

- 1 本書は、清武町大字今泉字田代堀、上ノ原、草伐道（通称角上原）にて行なわれた県営圃場整備事業（南今泉地区角上原工区）に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、中部農林振興局の委託を受け、昭和63年6月1日から、8月27日までの期間において、清武町教育委員会が、主体となって実施した。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	清武町教育委員会			
教育長	黒崎改司	教育次長	岩元昭夫	
社会教育課長	落合国利	同課長補佐	成合正皓	
同係長	小城員久	同文化財担当	川越健	
調査協力	宮崎県教育庁 文化課			
調査員	清武町教育委員会	社会教育課	嘱託	伊東但
調査員	宮崎県教育庁	文化課	主任主事	永友良典
調査補助員	別府大学	考古学研究室	卒業生	的場文明
- 4 調査については、田代堀第1遺跡A地区を永友、伊東が、B地区を伊東が、上ノ原遺跡を永友がそれぞれ担当し、実測は、田代堀第1遺跡を伊東が、上ノ原遺跡を永友が分担して行ない、川越がこれを補助した。
- 5 写真撮影は、田代堀第1遺跡を川越が、上ノ原遺跡を永友が行ない、測量については(有)清武設計に委託した。
- 6 本書の執筆、作図、トレースは、田代堀第1遺跡を伊東が、上ノ原遺跡を永友が担当し写真撮影及び、編集は伊東が行なった。
- 7 出土遺物のうち、陶磁器鑑定については、九州陶磁文化館、学芸課、大橋 康二氏に、石材鑑定については宮崎大学教育学部岩石鉱物学研究室、金子 弘二氏に御願した。
- 8 地形分類については、帝京大学山梨文化財研究所、古植物・地理研究室長、外山 修一氏に現地踏査を交えて依頼した。
- 9 遺構については略号を使用した。これについては混乱を避ける意味から、県文化課による宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書に準じ、住居跡-SA、掘立柱建物跡-SB、土壇-SC、溝状遺構-SEを使用した。
- 10 挿図中の方位についてはすべて磁北であり、レベルについては海拔絶対高である。
- 11 図版中の番号は、挿図番号を表わす。
- 12 地権者の方々には、深い御理解と御協力の上、労働力の提供まで頂いた。  
記して感謝の意を表したい。

# 本文目次

## 第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 遺跡の立地と環境 .....	1～4

## 第2章 田代堀第1遺跡（A・B地区）

第1節 調査区の概要 .....	9
第2節 縄文時代の遺構と遺物 .....	10
1 土 器 .....	10
2 石 器 .....	12～15
第3節 古墳時代の遺構と遺物	
1 堅穴式住居跡（SA-1） .....	15
2 土 器 .....	15～17
4節 中近世の遺構と遺物	
1 掘立柱建物跡 .....	18
2 土 墳 .....	22
3 溝状遺構 .....	22
4 陶磁器 .....	24
5 土師式土器 .....	25
6 石 鍋 .....	25
第5節 その他の遺構と遺物	
1 塚状遺構 .....	25
2 土 碓 .....	26
3 磨製石鏃 .....	26
第6節 まとめ .....	26～29

## 第3章 上ノ原遺跡

第1節 調査区の概要 .....	43
第2節 縄文時代の遺構と遺物 .....	43
1 縄文時代早期 .....	43
2 縄文時代晚期 .....	44
第3節 中近世の遺構と遺物 .....	44
第4節 まとめ .....	47

## 挿 図 目 次

### 田代堀第1遺跡

第1図	角上原遺跡群位置図	2
第2図	角上原遺跡群調査対象部分全体図	5～6
第3図	田代堀第1遺跡全体図	7～8
第4図	田代堀第1遺跡基本土層図	9
第5図	縄文土器実測図	11
第6図	縄文時代石器実測図	12
第7図	縄文時代石器実測図	13
第8図	縄文時代石器類実測図	14
第9図	堅穴式住居跡(SA-1)実測図	16
第10図	古墳時代出土遺物実測図	17
第11図	掘立柱建物跡実測図	19
第12図	掘立柱建物跡実測図	20
第13図	SC-1及びび出土遺物実測図	21
第14図	SC-2実測図	21
第15図	溝状遺物土層断面実測図	23
第16図	陶磁器実測図	24
第17図	中世遺物実測図	25
第18図	土砸、石鏃実測図	25

### 上ノ原遺跡

第19図	土層断面図	45～46
第20図	遺物分布図	45～46
第21図	遺構分布図	45～46
第22図	遺構実測図	49
第23図	出土遺物実測図及び拓影	50

## 表 目 次

### 田代堀第1遺跡

第1表	掘立柱建物跡一覧表	18
-----	-----------	----

## 上ノ原遺跡

第2表	石器観察表	47
第3表	土器観察表	48

## 図版目次

### 田代堀第1遺跡

図版1	角上原遺跡群遠景(北より)	30
図版2	田代堀第1遺跡A地区全景(東より)	30
図版3	田代堀第1遺跡A地区調査風景	31
図版4	竪穴式住居跡(SA-1)検出状況	31
図版5	掘立柱建物跡(SB-1~6)検出状況	32
図版6	掘立柱建物跡(SB-7・8)検出状況	32
図版7	掘立柱建物跡(SB-9)検出状況	33
図版8	掘立柱建物跡(SB-10)検出状況	33
図版9	田代堀第1遺跡B地区全景(西より)	34
図版10	掘立柱建物跡(SB-11・12)検出状況	34
図版11	掘立柱建物跡(SB-13)検出状況	35
図版12	SC-1検出状況	35
図版13	SC-2検出状況	36
図版14	SC-2内部礫除去状態	36
図版15	溝状遺構検出状況(SE-1・4)	37
図版16	塚状遺構検出状況	37
図版17	縄文式土器	38
図版18	縄文時代打製石斧	39
図版19	石器類	40
図版20	土師式土器	41
図版21	中近世陶磁器類	42

### 上ノ原遺跡

図版22	上ノ原遺跡調査区全景(南から)	51
図版23	柱穴検出状況(5・6区)	51
図版24	SC-1検出状況	52

図版25	調査区全景（縄文早期文化層 北から）.....	52
図版26	縄文早期遺物出土状況（2区）.....	53
図版27	土層堆積状況（3区南壁）.....	53
図版28	出土遺物 .....	54



# 第 1 章 序 説

## 第 1 節 調査に至る経緯

昭和63年、清武町角上地区に広がる畑地及び水田のうち、西半分（字上ノ原及び田代堀の一部）について県営圃場整備事業が行なわれることとなり、文化財の有無取り扱いについて、事業主体である中部農林振興局と県文化課、清武町教育委員会との協議が開始され、確認調査を行なうこととなった。

これを受け県文化課面高哲朗主任主事により昭和62年8月に分布調査、同近藤協主事により63年2月1日～5日、3月11日の6日間にわたって試掘調査が実施され、ほぼ事業区全体が遺跡としてとらえられる結果を得た。<sup>(1)</sup>

この結果をもとに、遺跡保護を前提に中部農林振興局と協議を重ねられたが、事業区全体（約150,000㎡）内、字田代堀の果樹園及び道路敷予定部分、字上ノ原の道路敷予定部分の約6,000㎡については工法上、現状保存が困難であることから記録保存を行なうこととなり、清武町教育委員会が主体となり発掘調査を行なうこととなった。

## 第 2 節 遺跡の立地と環境

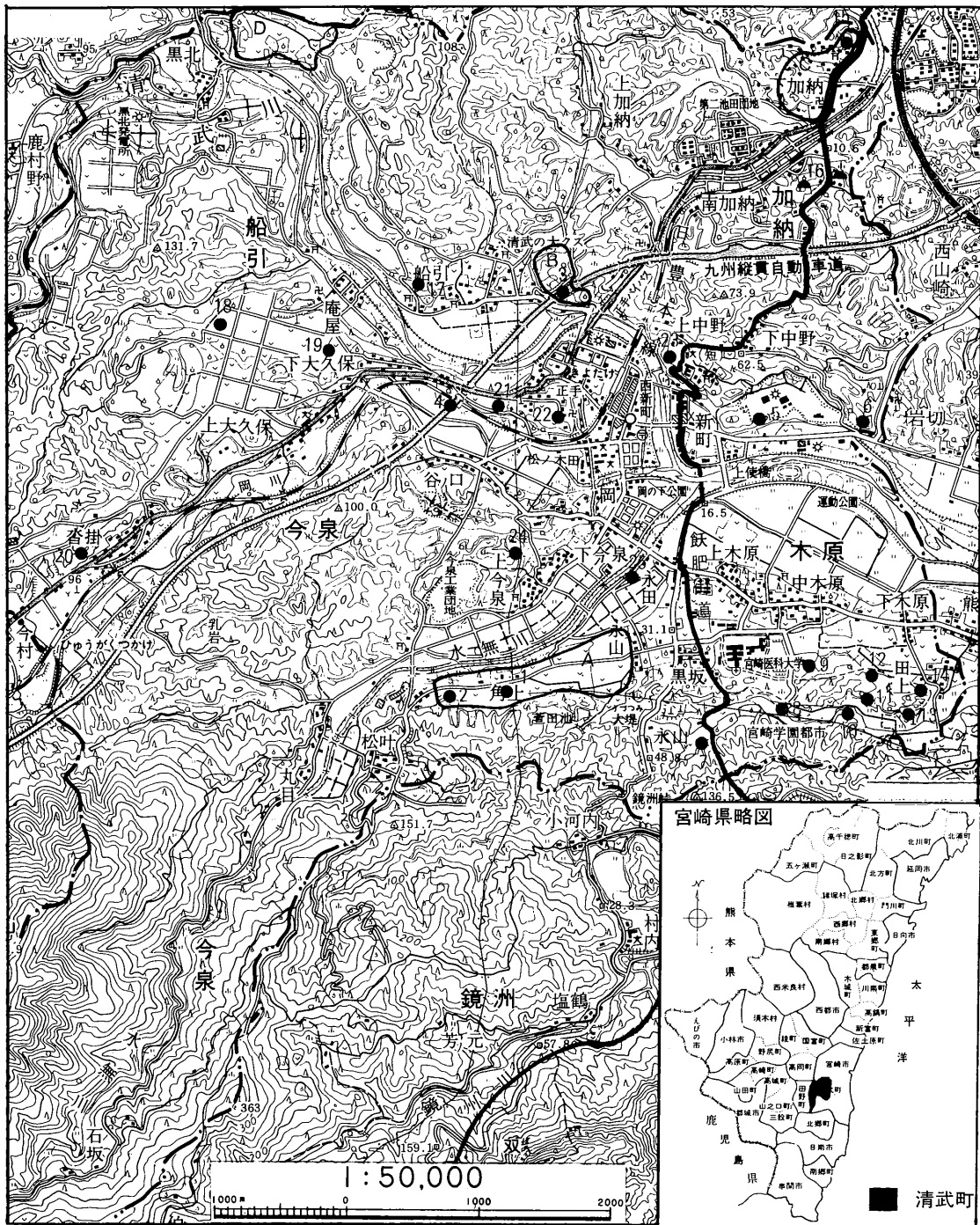
角上原遺跡群は清武町大字今泉、通称角上（字田代堀、上ノ原、草伐道）に所在し、清武川と支流の水無川の右岸の丘陵上に位置する。

この丘陵は、鰐塚山系より延び出たもので、清武川と加江田川にはさまれ河岸段丘が形成されているが、外山秀一氏による地形分類によれば、この段丘上の平坦地は低位Ⅰと中位Ⅱ、Ⅲがほとんどを占めており、角上原遺跡群はこの清武川に面する低位Ⅰの上流部に位置し、丘陵東端部の一段高い中位Ⅱ・Ⅲには宮崎学園都市遺跡群の大半が所在している。<sup>(2)</sup>

また、後背に丘陵、眼下に沖積面の広がるこの段丘上には、複雑に開析谷も入り込み、湧水点も多く、この丘陵上が、遺跡の立地条件を十分満たしていることが窺える。

近辺の遺跡としては、前述の宮崎学園都市遺跡群がまず揚げられ、昭和55年より、旧石器時代のとらえられた堂地西遺跡を始め、縄文時代早期から近世にかかる多数の遺跡が調査され、大正元年からの西都原古墳群の発掘調査以来低迷が続けていた本県古考学界に多大な資料と画期をもたらした。<sup>(3)</sup>

このうち清武町内には、下田畑遺跡、小山尻東遺跡、小山尻西遺跡、田上遺跡、赤坂遺跡、山内石塔群が所在し、旧石器時代のナイフ型石器が下田畑遺跡から、縄文時代早期の集石遺構及び土器、石器が下田畑、小山尻東、田上、赤坂の各遺跡から、弥生時代の堅穴式住居跡及び遺物が



- |             |           |            |            |            |
|-------------|-----------|------------|------------|------------|
| A 角上原遺跡群    | B 清武城跡    | C 加納遺跡     | D 船引上ノ原遺跡  | 1. 田代堀第1遺跡 |
| 2. 角上上ノ原遺跡  | 3. 城内遺跡   | 4. 小原遺跡    | 5. 辻遺跡     | 6. 若宮田遺跡   |
| 7. 山内石塔群    | 8. 赤坂遺跡   | 9. 下田畑遺跡   | 10. 入料遺跡   | 11. 浦田遺跡   |
| 12. 小山尻西石塔群 | 13. 田上遺跡  | 14. 小山尻東遺跡 | 15. 福神屋敷遺跡 | 16. 清武古墳   |
| 17. 淵ノ上遺跡   | 18. 杉木原遺跡 | 19. 下星野遺跡  | 20. 杏掛遺跡   | 21. 下ノ原遺跡  |
| 22. 正手遺跡    | 23. 上中野遺跡 | 24. 竹ノ山遺跡  | 25. 永田遺跡   |            |

第1図 角上原遺跡群位置図

下田畑、小山尻東遺跡から、平安時代の堅穴式住居跡、掘立柱建物跡及び遺物が下田畑、小山尻東、赤坂遺跡から、中世の石塔類が、小山尻西遺跡、山内石塔群からそれぞれ確認されている<sup>(4)</sup>。

また、清武川を挟んだ対岸の丘陵に於ては、九州縦貫自動車道関係遺跡として、昭和51年に城内遺跡、52年に小原遺跡<sup>(5)</sup>の調査が行われ、また、54年1月には若宮田遺跡<sup>(6)</sup>、54年6月には辻遺跡<sup>(7)</sup>の発掘調査が行われている。

城内遺跡は、清武城域内の遺跡で、二ノ丸跡と推定される遺構が検出され、若宮田遺跡では押型文、塞ノ神、吉田、前平、轟、市来等の各形式の縄文土器や糸切り底の土師器等が、辻遺跡では、押型文、塞ノ神、吉田、前平形式の縄文土器及び平安期の土師器、須恵器等が出土している。

このほか、清武町内において確認されている遺跡は、『文化庁版全国遺跡地図』によれば、散布地12ヶ所、古墳5基、城跡1ヶ所、『宮崎県縄文弥生考古遺物地名録』<sup>(8)</sup>によれば、散布地23ヶ所であり、このうち散布地の一つである加納遺跡は大正7年、京都帝大教授浜田耕作博士らの調査によりその名を知られる<sup>(9)</sup>が、古墳5基については、すでに消滅しており、『…地名録』中の散布地についても、重複や、現在明確にその場所の把握が出来るものがわずかで、その数も不明瞭である。

現在までの所、町内ではまだ、遺跡詳細分布調査は行なわれておらず、これ以外に存在する遺跡も相当数にのぼるものと思われる。

また、町内にはほぼ南北に、古来からの重要交通路である飫肥街道が縦断しており、清武城を始め、特に戦略上重要視された中近世を中心とした史跡が町内に散在し、ひとつの町の雰囲気醸し出している。

文献等からとらえられている中世以降の清武を見てみると。

鎌倉時代、町内における荘園とその支配関係は、「建久図田帳」によれば、宇佐宮弥勒寺領として船曳五十町、八条女院御領国富庄として、加納二百町、今泉三十町を見ることができ、この後南北朝時代には、建武中興の功により、国富庄は足利尊氏の所領となり、南加納に政所を置いて細川小四郎義門に治めさせたとされるが、「日向地誌」にも記載のとおり、現在もその政所の場所は明確にされていない<sup>(10)</sup>。

この時期（建武二年）、伊豆より伊東祐持が日向に下り、都於郡城を拠点にその勢力を延ばしていくが、室町時代に入ると日南山塊を挟んで伊東、島津の攻防が繰り返される。その重要な拠点となった清武城を中心に、伊東祐堯は日向のほぼ全域を平定し、この後約100年間、清武は伊東氏の所領となる。

安土桃山時代、木崎原の合戦により島津氏にやぶれた伊東義祐は天正五年、豊後落し、日向は島津氏の領地となるが、天正十五年、豊臣秀吉の九州征伐の功により義祐の子伊東祐兵からふたたび、飫肥、曾井、清武をこの後、幕末までの約300年間所領することとなる。

このように、清武町の中近世は武士階級の文化が広く浸透する基盤を持っており、特に現市街

地を取り囲む丘陵地帯には、寺院、神社が数多く建立され、「日向地誌」によると寺院16、神社5を数える。

中でも、明治5年に廃寺となった黒坂勢田寺は日向七堂伽藍の一つに数えられ、十二支院を持つ大伽藍であったとされ、宮崎学園都市遺跡群中の山内石塔群及び県指定有形文化財の五輪塔は、この勢田寺に関連するものとされる。

このほか、町内には多数の石造物や木造物が散在し、また、幕末には、安井息軒、平部嶠南<sup>(11)</sup>といった人材も生み出している。

- 註(1) 昭和62年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概報 1988 宮崎県教育委員会
- (2) 現地調査の際、上ノ原遺跡付近の露頭に於て、シラス層と思われる火山灰層が礫層下に位置する状況が確認されるなど、幾つかの即断出来ない問題も指摘されており、今後再考される可能性もある。
- (3) 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第1・2・3・4集 1984~1988 宮崎県教育委員会
- (4) 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第3集 1985 宮崎県教育委員会
- (5) 九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書(3) 1976 宮崎県教育委員会
- (6) 若宮田遺跡発掘調査報告書 1979 清武町教育委員会
- (7) 辻遺跡 1980 清武町教育委員会
- (8) 宮崎県文化財調査報告書 第二輯所収 1957 田中熊雄
- (9) 調査場所については現在不明で、『宮崎県の考古学』中、石川恒太郎氏は、妙(明)栄寺西側の調査ケ所について“加納遺跡”の名称を使用されているが、遺跡自体の時期は後期とされており、浜田博士らの調査ケ所とは異なる様である。
- ここでは、近辺の福神屋敷遺跡、寺屋敷遺跡等を含めた“遺跡群”の名称としてとらえたい。
- (10) 『清武町史』中、石川恒太郎氏は『建久図田帳』と後の『日向国五郡分帳』との加納の町数の違いについて、“加納が南加納と北加納に分かれ、南加納が木原となり、北加納が加納として残り、現在の南加納の地名は、後世のもの”と考察されており、この意見に追従すれば、政所の所在は現在の木原地区内と言うことにもなる。
- (11) 清武町の文化財 石造物編第1~4集 木造物編 1978~1982 清武町教育委員会



第2図 角上原遺跡群調査対象部分全体図



第3図 田代堀第1遺跡全体図

## 第2章 田代堀第1遺跡A、B地区

### 第1節 調査区の概要

田代堀第1遺跡は、本年度事業区の東端に位置し、今回の調査区は工法上地下遺構に影響を及ぼす蜜柑園（約4,000㎡）及び、その南側に近接する道路敷予定部分（約1,500㎡）の2地区で蜜柑園部分をA地区、道路敷予定部分をB地区とした。

また、B地区の東に隣接して、南側の丘陵地帯に建設の予定されているゴルフ場に係る導入路部分（仮称C地区）の調査も、昭和63年4月に日高正晴氏により行なわれており、これら3地区は、面的に連続する1遺跡内としてとらえられる。

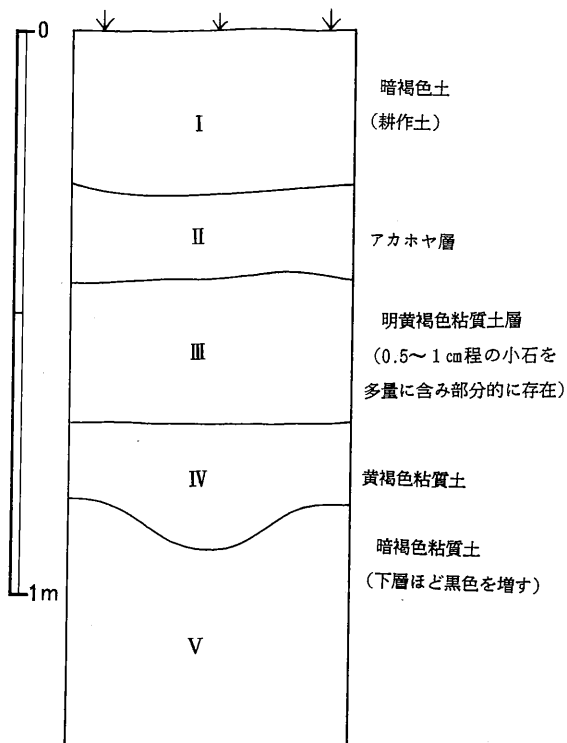
表土下の基本層序については、第4図に示すとおりで、耕作土直下はアカホヤ層となっておりこの間の遺物包含層は攪乱され、アカホヤ層についても部分的に攪乱を受けている。

アカホヤ層下については、粘質土が続き、南（丘陵との間の谷方向）に行くにつれてⅢ層は薄くなり、C地区西側においてはアカホヤ層まで削平を受け、Ⅰ層（耕作土）直下には強粘性のⅣ層が位置しており、この間の遺物包含層も確認できなかった。

また、この下層については付近の切り通しから、礫層になることが窺われ、この間にシラス層は確認できない。

調査については、蜜柑を人力により抜根し、耕作土を重機及び人力により除去して遺構の検出を行ない、古墳時代の堅穴式住居跡1軒、中近世のものと思われる掘立柱建物跡13棟、及び溝状遺構等を検出した他、縄文時代の土器、石器、土師式土器、陶磁器類の出土を見た。

出土遺物については、ほとんどが耕作土中からの出土で、遺構に伴うものは堅穴式住居跡、溝状遺構、ピット、土壇等から出土しているが、確実に遺構に伴うと思われるものは、堅穴式住居跡内出土遺物以外には、ほとんどとらえられなかった。



第4図 田代堀第1遺跡基本土層図

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

田代掘第1遺跡A地区及びB地区内においては、土器、石器等、少量ではあるが、縄文期の遺物が出土したが、いずれも表土除去の際の耕作土や、後世のものと思われる遺構が埋積土中からの出土ばかりであり、この時期に比定される遺構もまた、明確にとらえられなかった。

### 1 土器 (第5図 図版17)

縄文土器の出土は、A地区のみに見られ、更にB-2・3区、E・F・G-5・6区、F・G-3・4区、J-3区を中心に集中する傾向がみられる。

その内、図化できるものを掲載した。

1～3は精製磨研土器で、いずれも浅鉢と思われる。

1は底部を欠損した約4分の1個体分の土器片で、内面に稜を持って短く外反する口辺部より張り出した胴部をもち、色調は暗褐色から部分的に黒褐色を呈するもので、2・3より精製された粘土を使用し丁寧に成型され、また内外面ともに磨き込まれている。

口縁部は内面に一条の凹線が巡り、口唇部の一ヶ所に俵状の張り付け突起がみられる。

2は口辺部片で暗黄褐色を呈し、内面に稜を持ってくの字に短く外反する口縁部の外側に一条の凹線を巡らし、内面口辺部を肥厚させ、リボン状の張り付け突起を持つものである。

1に比べ器面の光沢も少なく、胎土中の砂粒も、あまり精製されていないようである。

口辺部内外面及び胴部外面は、ヘラ磨きが施されているが、胴部内面についてはケズリに近いヘラナデによる調整が施されている。

3は2と同様のリボン状の張り付け突起の破片である。

4はリボン状の突起を口唇部にもつ口辺部片であるが、粗製の土器であり、1～3の様に明確な張り付けのものではない、外面はナデ、内面はヘラナデにより調整されている。

5、6、7は深鉢の口辺部片で、口縁部が肥厚する特徴をもつものであるが、7については突帯状になっている。

8、9は浅鉢の破片と思われるが、くの字に折れる胴部に短い口辺部の付くもので、焼きが良く、胎土中に精製された砂粒を多く含んでいる。

10、11、12は貝殻条痕文の施された土器で、いずれも深鉢型の土器片と思われる。

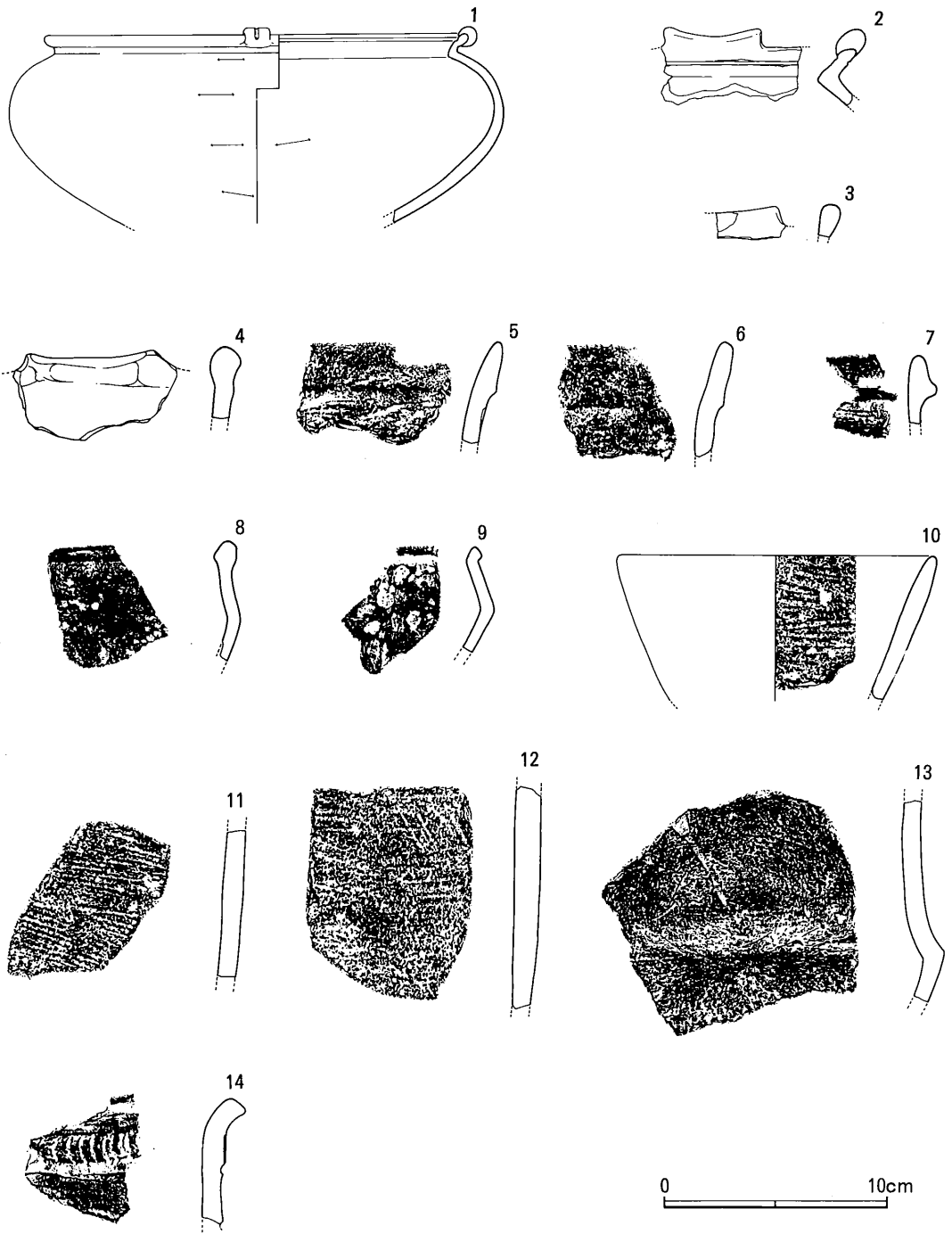
10は、直線的に開く口辺部片で、外面はナデ、内面に貝殻条痕文が施されている。

11、12は胴部片で、共に内面調整はナデ、外面に貝殻条痕文が施されている。

13は深鉢片で、開きぎみに立ち上がる胴部から、稜を持って一旦内向しながら外反する口辺部につながるものである。

14は深鉢の口辺部片で、口縁部直下に横方向の凹線文と縦方向の貝殻複縁による連続刺突文を施す波状口縁のものである。





第5図 繩文土器実測図

## 2 石器 (第6~8図 図版18・19)

出土した石器は、磨石、打製石斧、石鏃、石匙、石錐、石碓等で、打製石斧と磨石が、その大半を占めている。

出土状態は、耕作土中からの出土がほとんどで、その集中範囲も縄文土器とほぼ同じであるが、特に磨石については、そのほとんどがB-1・2区及びE・F-5・6区と、縄文土器の集中範囲内からの出土である。

また、7点出土した打製石斧であるが、すべてB-2・3区からの出土で、且つ、そのすべてが折損しており、同質材の大型剥片数点も供伴することから、製作中の失敗品であることが窺える。

さらにG・H-4・5区の中央付近においても同様に、大型剥片の集中が見られるが、これについては、製品は見当たらない。

1、2は石匙で、石材は1がチャート、2が姫島産黒曜石を使用している。

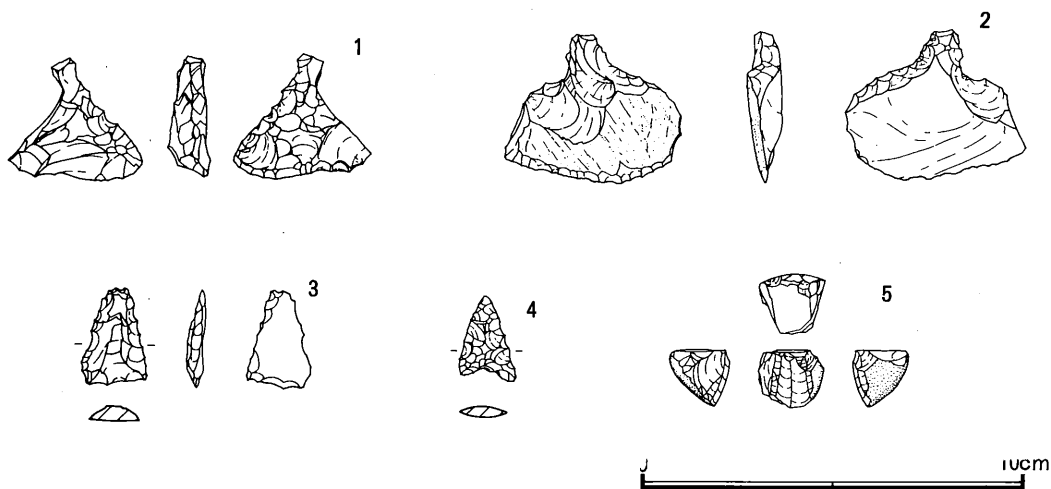
1は厚手で三角形を呈し、片側からの調整によってつまみを作り出し、刃部は、片面調整によるものである。

2は片面に自然面、片面に剥離面を残し、両側からの調整によってつまみを作り出したもので肩を持ち、刃部はアールを描き、剥離面からの片面調整が行なわれている。

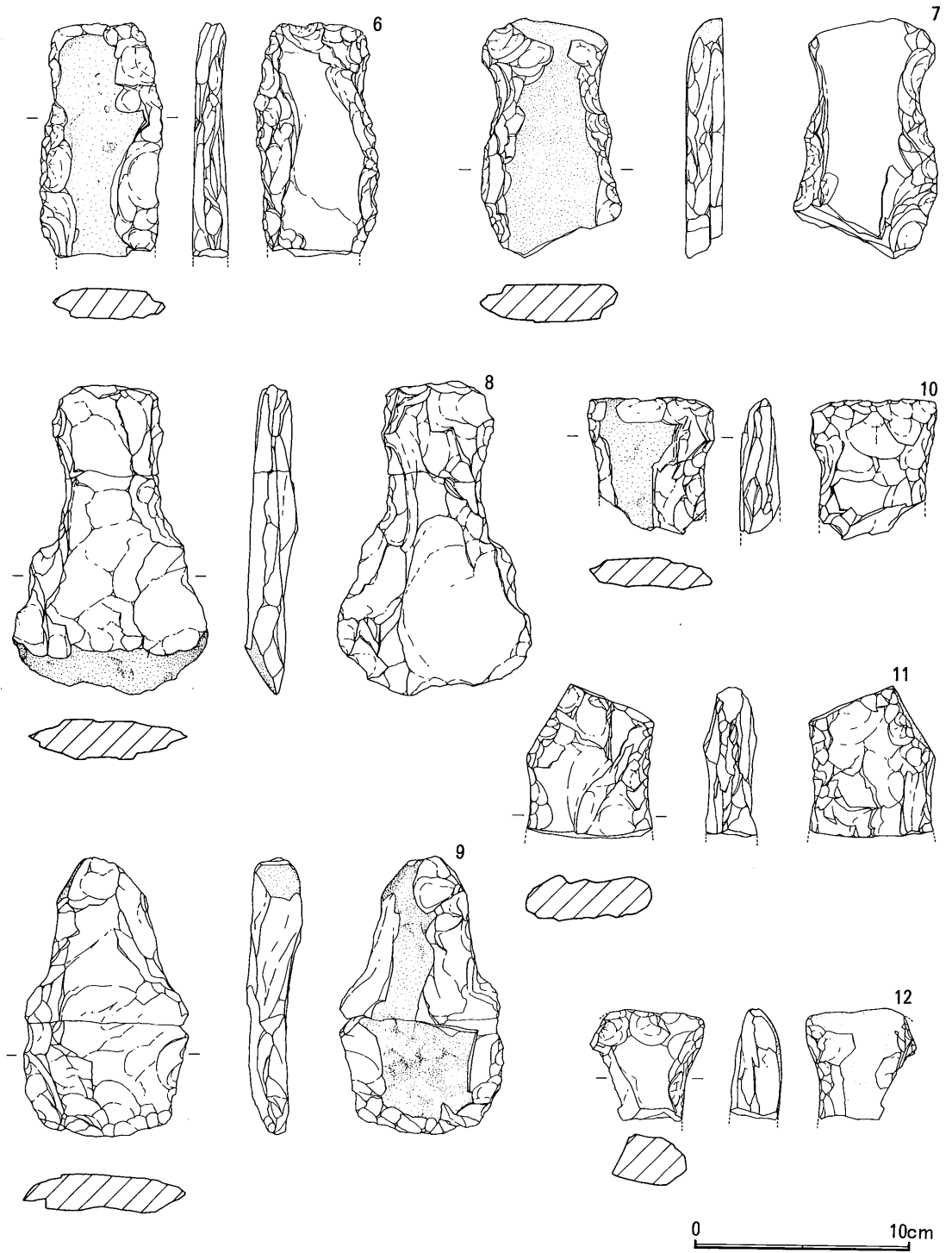
3、4は石鏃で石材は、3がチャート、4が頁岩を使用している。

3は二等辺三角形を呈し、片面調整により製作されており、4は凹基無茎鏃である。

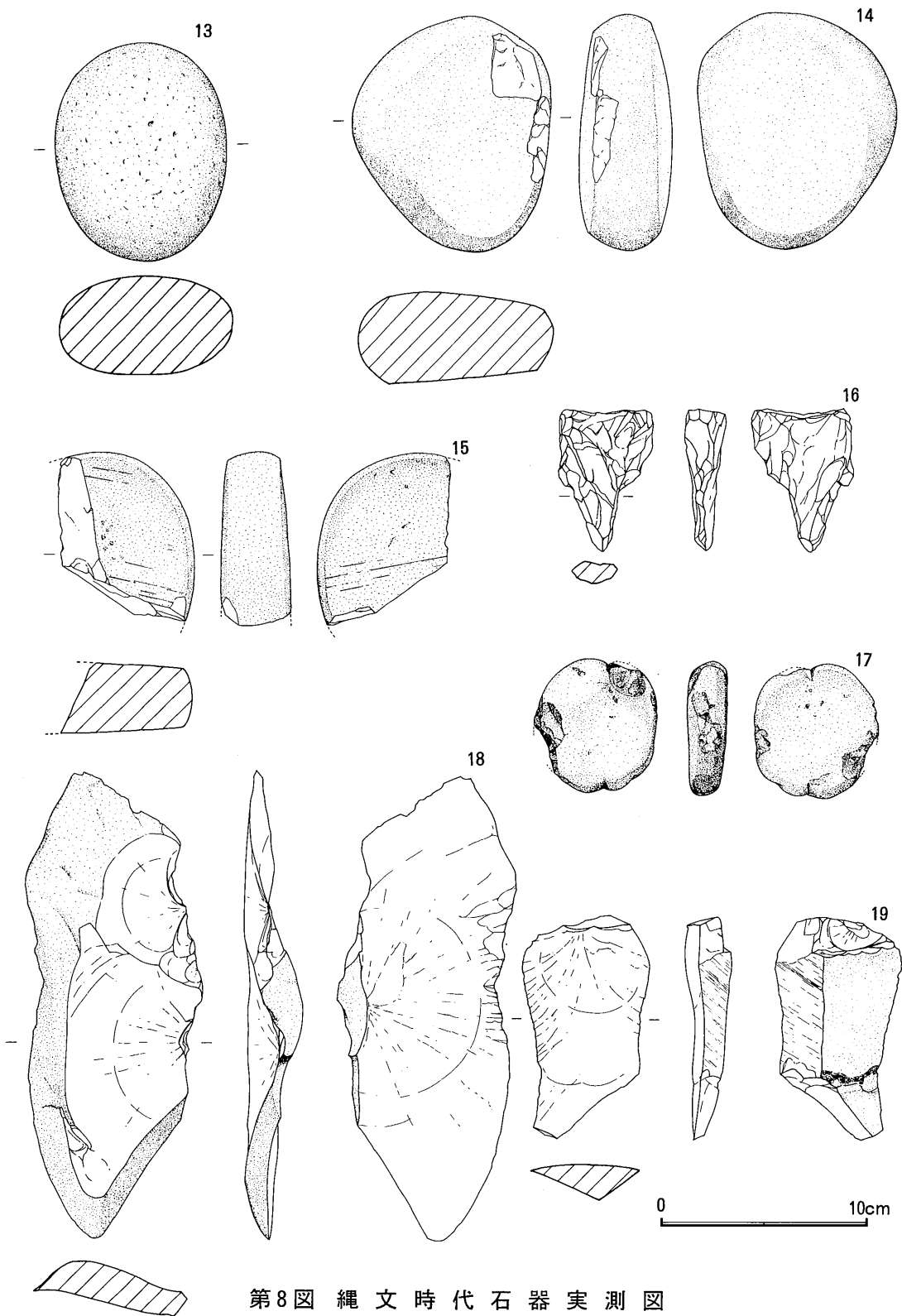
5はチャートの小円礫を素材とした1.5cm程の細石核で、側面及び背面に自然面を残したまま、主に一面からの細石刃剥取が行なわれている。



第6図 縄文時代石器実測図



第7図 縄文時代石器実測図



第8図 縄文時代石器実測図

6～12は打製石斧及び石斧片で、前述のとおり、すべてB-2・3区からの出土で、いずれも荒い調整によって整形されている。

6、7は扁平な砂岩剥片を素材とした所謂短冊形のもので、6は一端を欠損しており、欠損部が頭部か刃部か明確にし難い、7は頭部側面を、やや挟り込んでおり、刃部を欠損している。

8は砂岩を素材としたもので、側面を挟り込み、撥形を呈し、幅広の刃部の一面に自然面を残す。

9は砂岩を素材としたもので、ボトル状を呈し、頭部から片面の一部にかけ自然面を残す。

10～12は石斧の頭部片で、石材はいずれも砂岩である。

13～15は磨石で、13は、A地区南東角の塚状遺構中からの出土、14、15は、SE-2の埋積土中からの出土である。

13は安産岩を素材としており、整った楕円形の平面で、一面に使用痕跡を良く残す。

14、15は砂岩を素材としており、両使用面は極端な平坦面となっており、15の使用面に残る条痕からは、方向性を持って使用されたことも窺える。

16は、錐状の石器で、砂岩を素材としている。

17は砂岩製の石槌で、B地区出土、扁平な河原石の両端に切れ目が施されている。

18、19は剥片で石材は砂岩、G・H-4・5区に集中して出土したものの一部である。

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

#### 1 堅穴式住居跡 (SA-1) (第9図 図版4)

田代堀第1遺跡に於て、古墳時代に比定できるものに、堅穴式住居跡 (SA-1) とその出土遺物が主体としてあげられる。

SA-1は、A地区C-3区に於て検出されたもので、約6.9×6.5mの隅丸方形プランで、残存壁高は、約0.7m、床面はほぼ平坦である。

柱穴及び炉跡等は確認されなかったが、埋積土中に若干炭化物の集中部分がみられた。

#### 2 土器 (第10図 図版20)

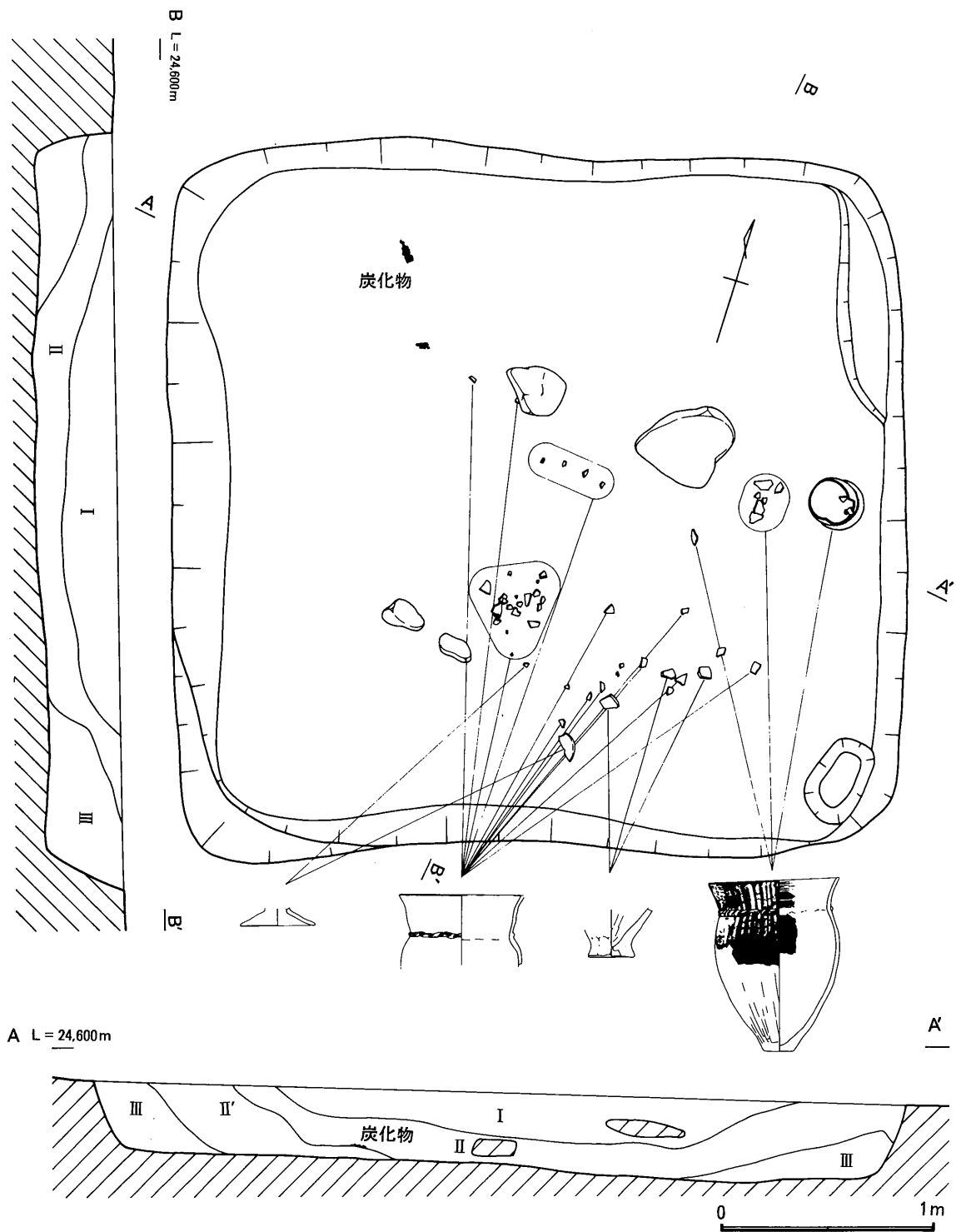
1～4はSA-1からの出土遺物で、住居跡内、南東部分に集中して残存していた。

1は甕形土器で、小径の平底底部から上方に最大径を持つ胴部に続き、くの字に折れて外反する長めの口辺部が付く。

頸部には布目を残す緒状突帯が巡り、口辺部から胴部上半の外面には煤が付着しているが、吹き零れによるものであろうか、数条の帯状に煤の流れ落ちが見られる。

調整は全体的にナデ調整で行なわれ、底部外面には、縦方向のヘラナデ痕が残る。

2は高坏の脚裾部片で、直線的に広がる小形のもので、直立ぎみに立ち上がる脚部につながるものと思われる。



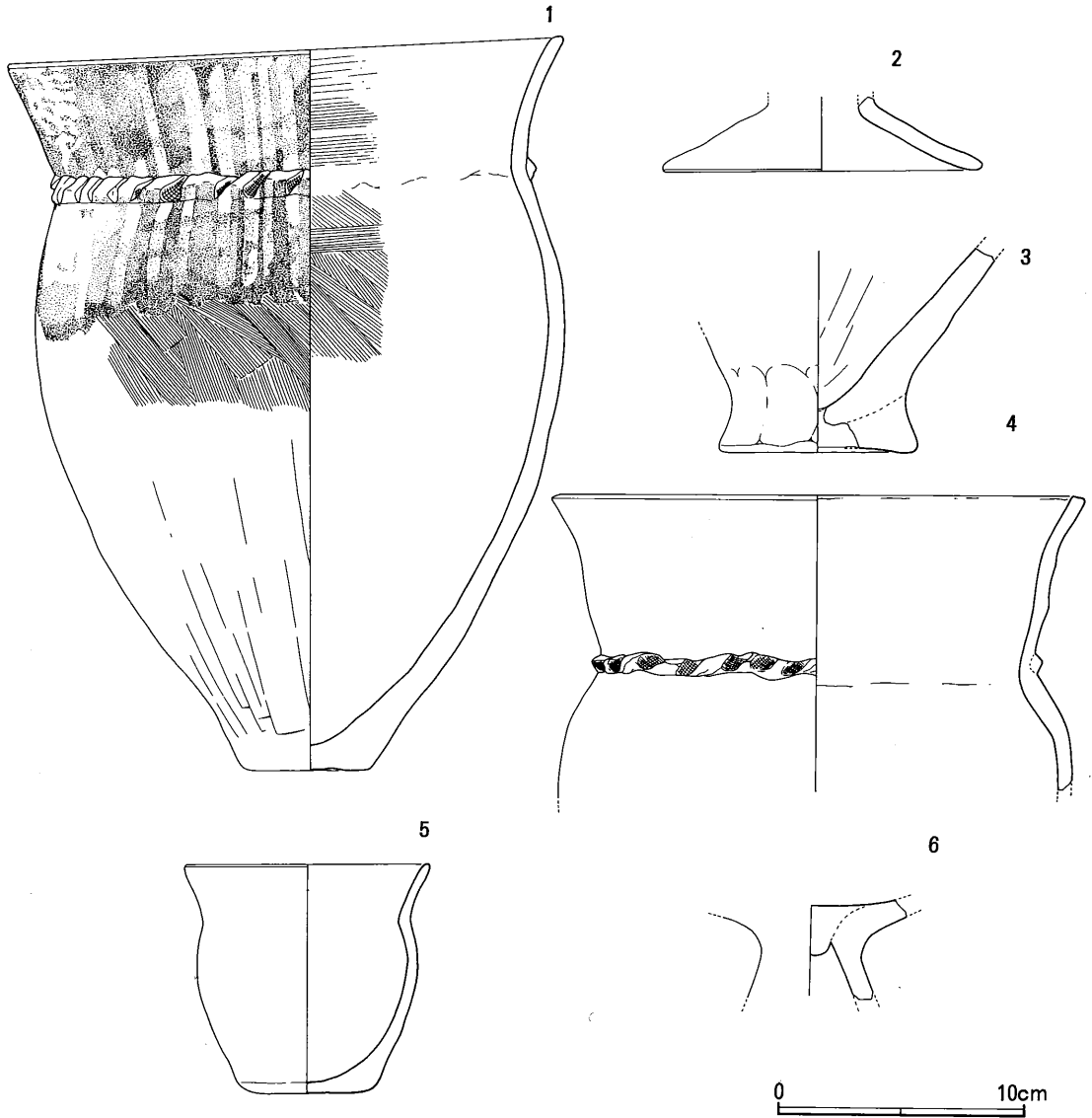
第9図 堅穴式住居跡 (SA-1) 実測図

3は甕形土器の底部と思われるが、裾部が開く平底のものである。

4は甕形土器の胴部上半から口辺部片で、1と同様、長めの口辺部と頸部の布目を残す絡状突帯が特徴的であるが、口唇部に平坦面を持つ。

5は、C-1区耕作土直下にて出土した小形の甕形土器で、平底の薄手造のものである。

6は高坏片で、D・E-4・5区からの出土、坏部と脚部がなだらかにつながる内部充填式のもので、全体は不明であるが、一応、ここでとりあげる。



第10図 古墳時代出土遺物実測図

#### 第4節 中近世の遺構と遺物

##### 1 掘立柱建物跡 (第11・12図 図版5～8・10・11)

田代掘第1遺跡にて検出された掘立柱建物跡はA地区10棟、B地区3棟のあわせて13棟である。

各建物の規模、柱間等は第1表のとおりで、内訳は2間×1間が6軒、3間×2間が4軒、2間×2間が2軒、3間×1間が1軒と、2間×1間と3間×2間がほぼ大半を占め、また、梁行が2間のものと、1間のものは、ほぼ半々で、2間のものはA地区西側とB地区に見られる。

主軸は、ほぼ東西方向と、南北方向に分けられるが、東西方向が9軒と、多数を占める。

特徴的な建物としては、SB-3とSB-10があげられ、南北に主軸を持つSB-3には西に、東西に主軸を持つSB-10には北に廂が見られる。

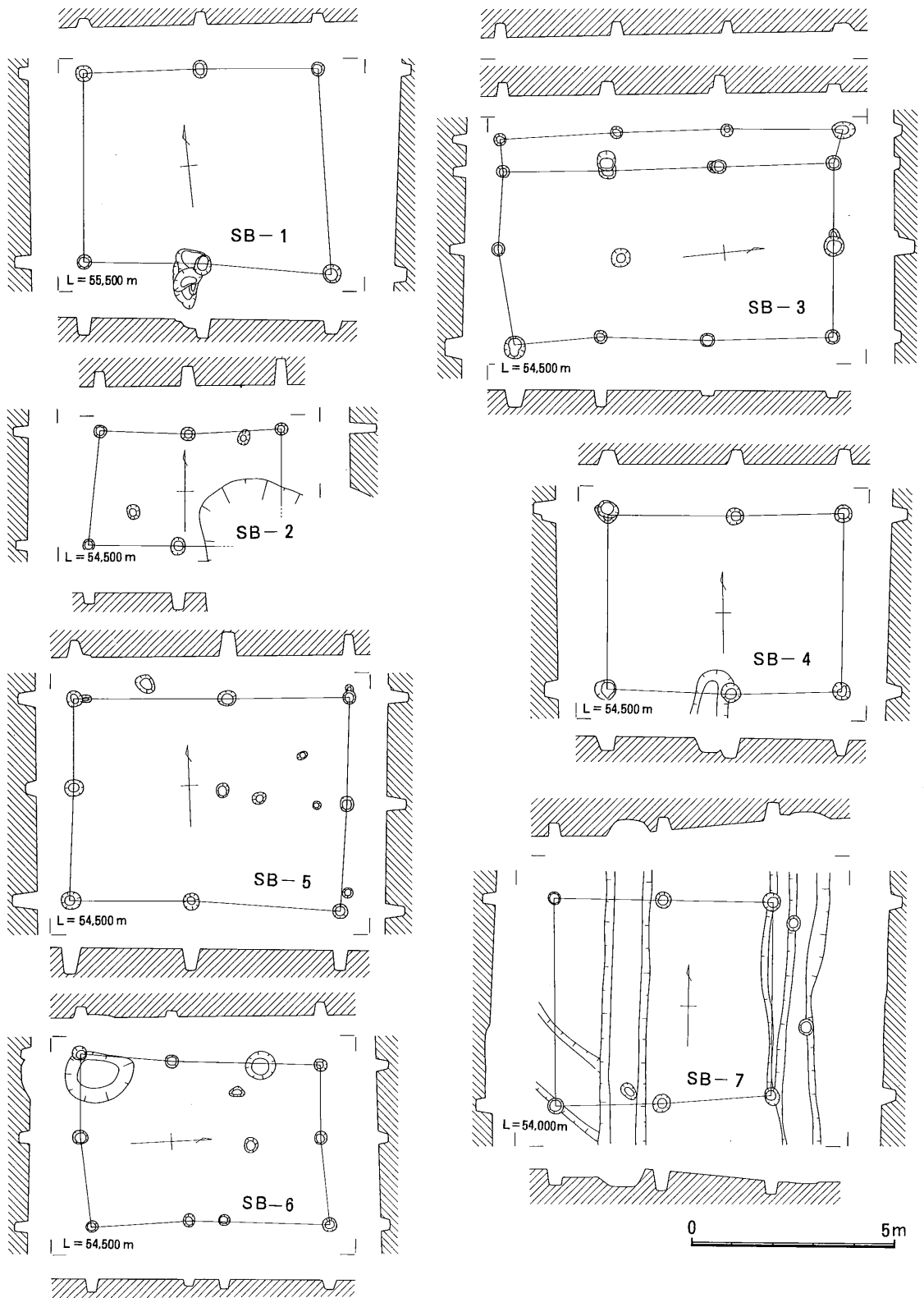
切り合い関係については、SB-3とSB-4、SB-7とSE-4・5、SB-8とSE-1、SB10とSE-3、SB-9・11とトレンチ状遺構に見られるが、SB-7とSE-5、SB-10とSE-3の切り合いについて、柱穴の検出状況から掘立柱建物跡の先行が窺われる他は明確にとらえられなかった。

また、掘立柱建物跡に伴う遺物については柱穴等からの明確な出土は無く、耕作土中ながら遺構周辺に出土する陶磁器類がこれにあたると思われる。

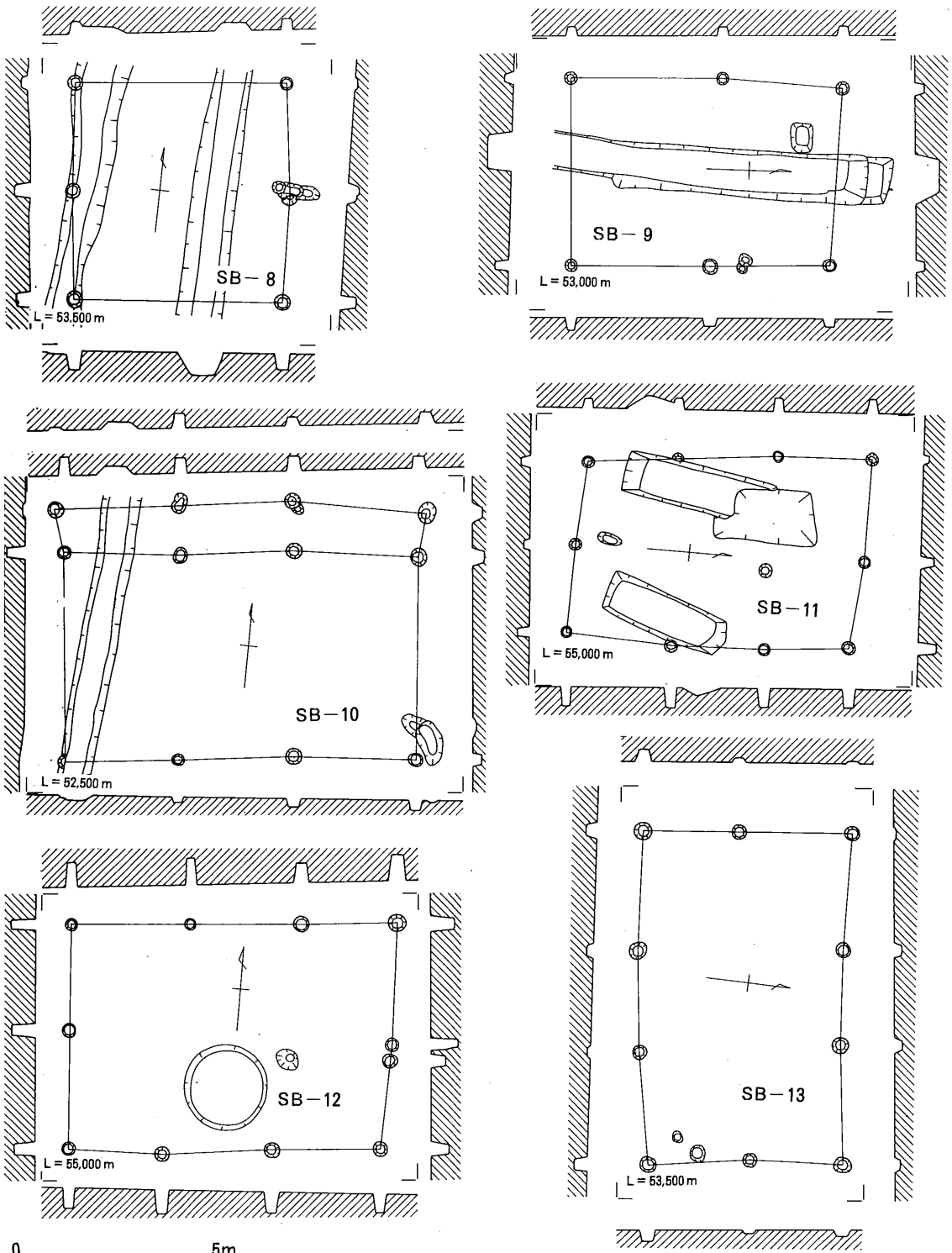
遺構名	柱間	桁行m	梁行m	柱間寸法(m)		主軸方向	備考
				桁行	梁行		
SB-1	1間×2間	4	3.4	2	3.4	N-86°-W	
SB-2	1間×2間	3.1	2	1.6	2	N-89°-W	
SB-3	2間×3間	5.7	3	1.9	1.5	N-5°-E	西側に廂をもちSB-4と切り合う
SB-4	1間×2間	4	3	1.9	3	N-83°-W	SB-3と切り合う
SB-5	2間×2間	4.8	3.6	2.4	1.8	N-83°-W	
SB-6	2間×2間	4	2.8	2	1.4	N-4°-E	桁行の柱が整然と並ばない、 2間でとらえる。
SB-7	1間×2間	3.6	3.5	1.8	3.5	N-88°-E	SE-4と切り合う
SB-8	1間×2間	3.6	3.5	1.8	3.5	N-6°-W	SE-1・7と切り合う
SB-9	1間×2間	4.4	3	2.2	3	N-1°-W	
SB-10	1間×3間	5.7	3.4	1.9	3.4	N-85°-E	北側に廂をもちSE-2と切り合う
SB-11	2間×3間	4.7	3	1.6	1.5	N-2°-W	
SB-12	2間×3間	5.4	3.8	1.8	1.9	N-85°-E	
SB-13	2間×3間	5.4	3.4	1.8	1.7	N-84°-E	

第1表 掘立柱建物跡一覽表

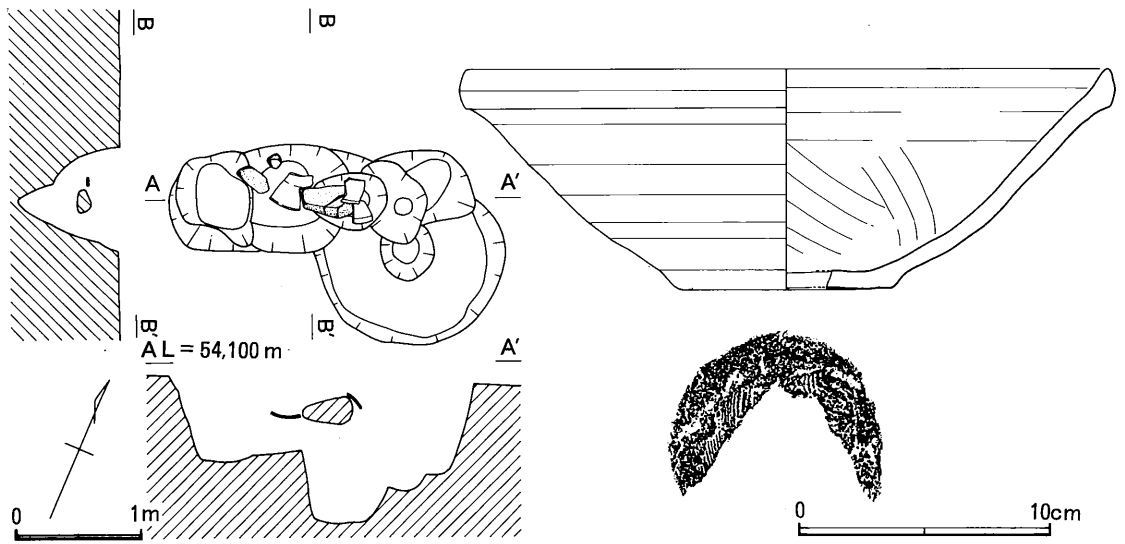




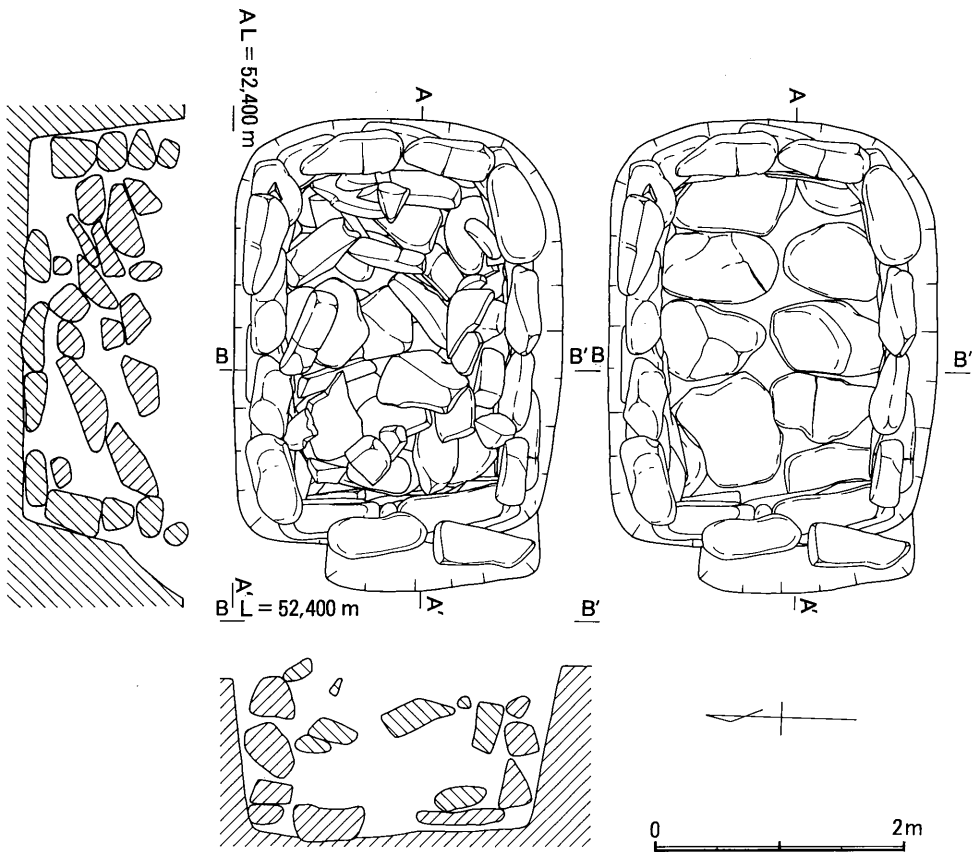
第11图 掘立柱建物跡实测图



第12図 掘立柱建物跡実測図



第13図 SC-1 及び出土遺物実測図



第14図 SC-2 実測図

## 2 土 壙

### SC-1 (第13図 図版12)

SC-1はB地区G-5区において検出されたもので、多数の堀込みの重複を受け、形態、規模等明確にしえないが、埋積土中から河原石を伴って、東播系のこね鉢が約半個体分出土した。

こね鉢は口径約26cm、底径約8.5cm、高さ約8.8cmを計り、底部は糸切り後に外周をなでている。

内面には手によるなで跡が残り、口縁部外周のみ、灰かぶりによるとおもわれる釉が見られる事から、臥せた状態で重ね焼きされたことが窺える。

### SC-2 (第14図 図版13・14)

A地区J-2区において検出されたもので、長辺3.4m、短辺2.6m、深さ1.2mの長方形プランの堀方の底に、扁平な大型の河原石を整然と2列にならべ、さらに4方の壁に沿って大型の長めの河原石が積みあげられている土壙である。

検出時には、この内部に壁材と同じ河原石が、多量に落ち込んでおり、天井が構築されていた可能性も窺わせた。

内部の石は熱を受けており、底部付近の埋積土は黒色を呈し、炭化物を含んでいる。

遺物の出土は無いが、A地区北側に集中して検出されたトレンチ状の堀込みを切って構築されており近世の所産と思われる。

## 3 溝状遺構 (第3・15図 図版15)

田代堀第1遺跡においては溝状遺構が多数検出されているが、この溝のほとんどがA地区D区からB地区にかけ南北に走るSE-1を中心につながっており、いずれも同時期の所産と思われる。

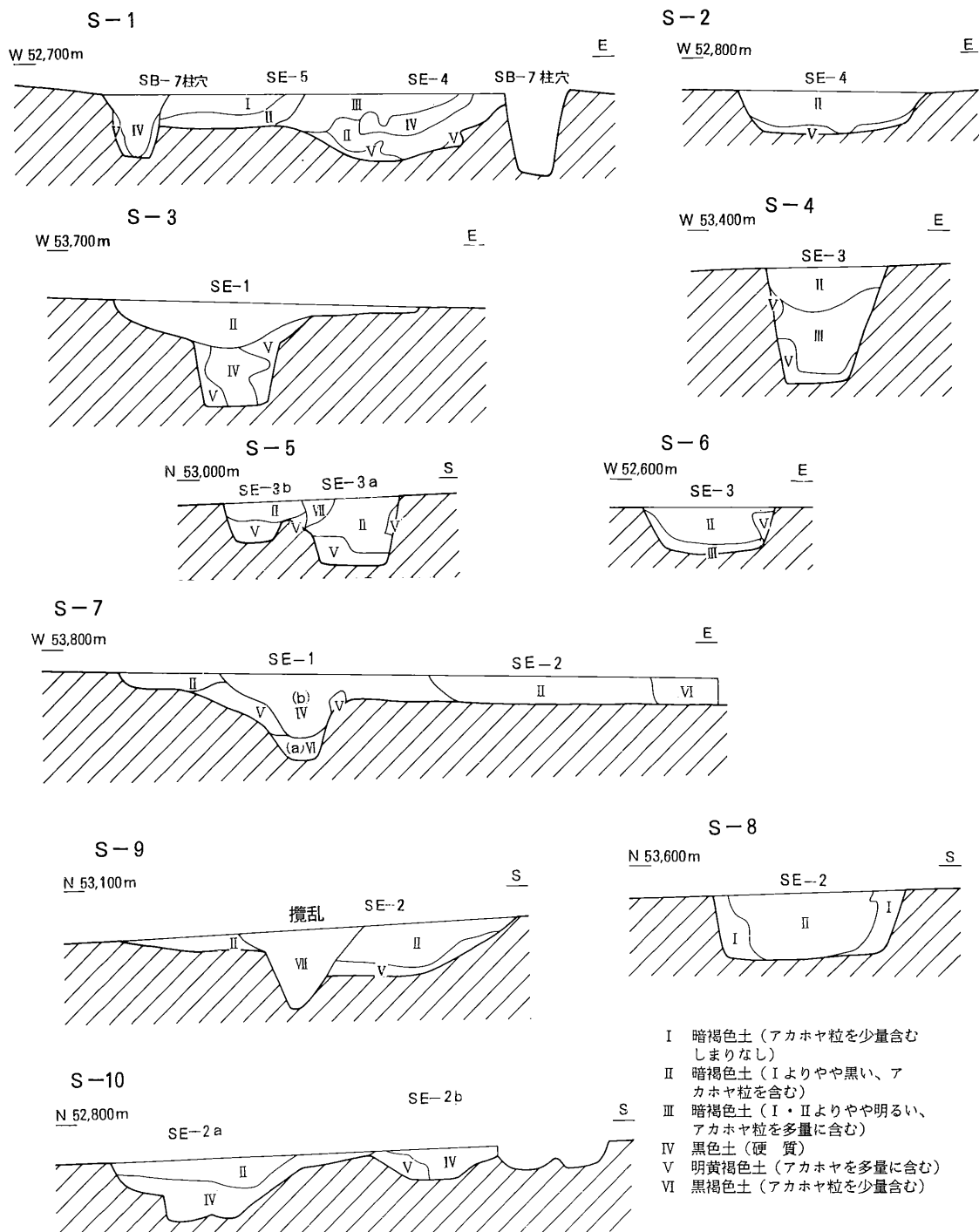
ただ、SE-1とSE-2の接点については、つながるのか切り合いかが、土層観察からも明確にできず、2時期の可能性も残している。

この内SE-1・2・3については再構築が行なわれており、それぞれa・bに分けられるが、SE-3とSE-1との接点では、SE-1aとSE-3はつながっていない。

出土遺物については、埋積土中より、縄文期の磨石(SE-2)や、糸切り底の土師器の坏(SE-3)等が出土しているが、時期的な判断材料とはなりがたい。

ただ、掘立柱建物跡との切り合い(SB-7とSE-4)では、溝状遺構の土層断面観察から溝状遺構(SE-4)が先行することが窺える。

また、A地区東側のC地区(別件調査区)において、幅約5m、深さ約1.5mほどの大型溝状遺構が検出されており、今回も東西に走るこの大溝の続きのプランをA地区北側にて確



- I 暗褐色土 (アカホヤ粒を少量含む  
しまりなし)
- II 暗褐色土 (Iよりやや黒い、ア  
カホヤ粒を含む)
- III 暗褐色土 (I・IIよりやや明るい、  
アカホヤ粒を多量に含む)
- IV 黒色土 (硬質)
- V 明黄褐色土 (アカホヤを多量に含む)
- VI 黒褐色土 (アカホヤ粒を少量含む)



第15図 溝状遺構土層断面実測図

認したが、A地区内の溝状遺構はこの大溝につながるものと思われる。

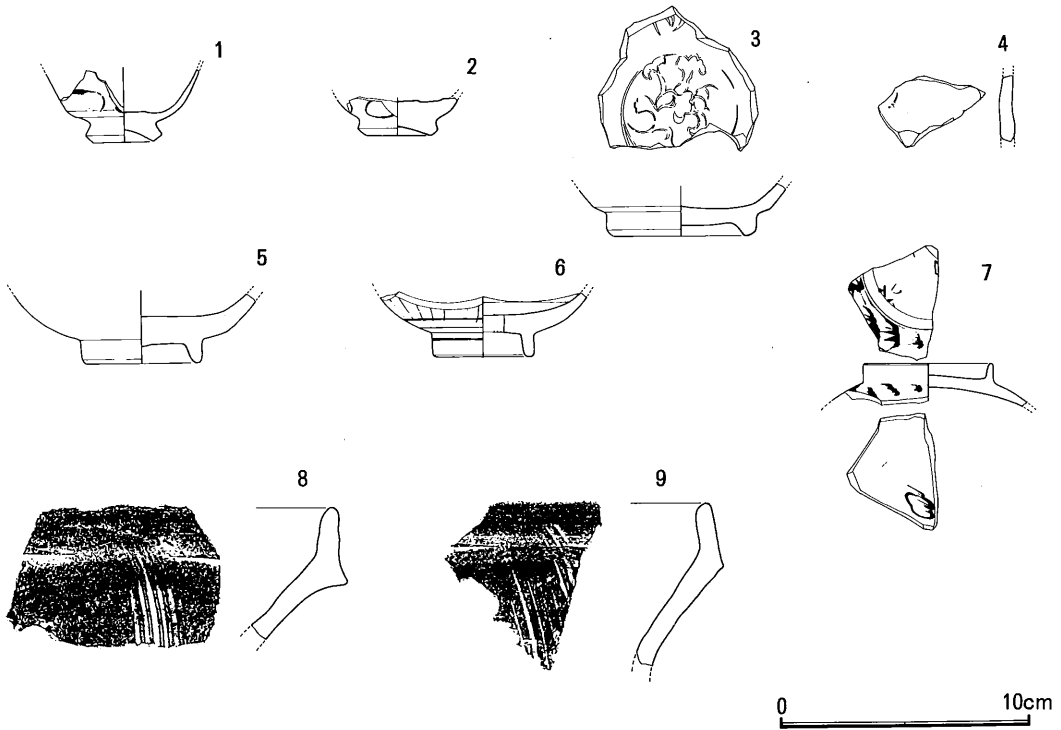
#### 4 陶磁器類 (第16図 図版21)

陶磁器類はほとんどA地区耕作土中からの出土で、細片であるが概ねつぎのような内訳である。

舶載陶磁器	中国	青磁	白磁	染付	明三彩
国産陶磁器	肥前系	染付	青磁染付	陶胎染付	
	唐津系	陶器			
	常滑系	陶器 (甕、壺)			
	備前系	陶器 (すり鉢)			
	東播系	陶器 (こね鉢) / SC-1 出土			

この内、圧倒的に多く出土したものが肥前系染付と中国青磁、染付で、この3種で大半を占めている。

第18図1・2は中国染付の台付小坏で、高台裾部外周が斜めに剃がれ、三角形の断面を呈し、この部分から高台内面にかけて、また、見込みを蛇ノ目状に釉剥ぎを行なっている。



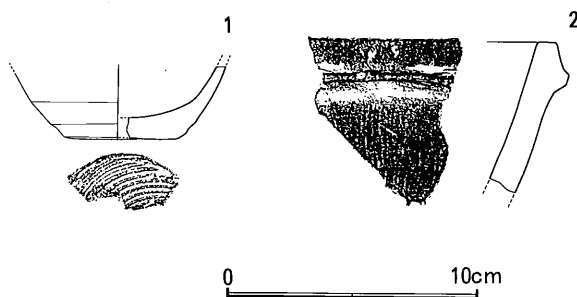
第16図 陶磁器実測図

3は中国製稜花型青磁皿片で、見込みに印花文が施され、高台内面には施釉されていない。4は明三彩片で、器形は不明、白化粧土がかけられ、緑と黄の施釉がみられる。

5は肥前系磁器の椀片で、高台周辺は全面施釉され、見込みには施釉時の刷毛目が残る。

6は肥前系染付の端反り型椀片、

7は広東型椀蓋片で、8・9は備前系のすり鉢である。



第17図 中世遺物実測図

#### 5 土師式土器 (第17図1 図版21)

溝状遺構 (SE-3) のI-3区部分埋土中にて出土したもので、小片の為全体は不明であるが、底部に糸切り離し痕が残る坏の破片である。

#### 6 石鍋 (第17図2 図版21)

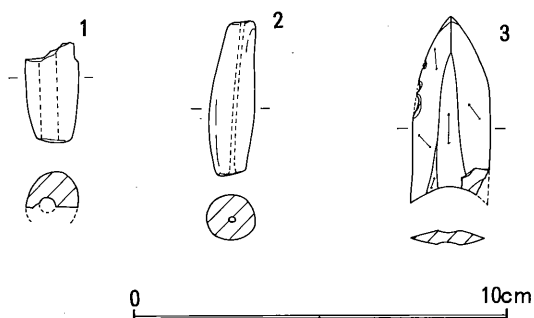
A地区耕作土中から口縁部片のみ出土したもので、滑石製である。

### 第5節 その他の遺構と遺物

#### 1 塚状遺構 (第3図 図版16)

A地区の南東角に位置し、調査前から畑中に小さな古墳の様に存在していたものであるが、所々に小形の五輪塔が顔を出しており、表土を除去したところ、大量の五輪塔、河原石、角礫等を積み上げたものであった。

この中には縄文時代の磨石や、土器片等も含まれており、平畑遺跡にも同例の見られるとおり、周



第18図 土 礮 鍬 実 測 図

辺の畑が開かれた際にガラとして集められたものと思われる。

## 2 土 錘 (第18図1・2 図版19)

A地区耕作土中にて出土したもので、1は約 $\frac{1}{4}$ 残存、2は完形品、いずれも手づくねで作られており、2は1に比べ非常に細い穿孔がなされている。

## 3 磨製石鏃 (第18図3 図版19)

A地区J-4区にて出土したもので、石材に頁岩を使用している。

砲弾型を呈し、基部を弧状に挟る無茎のもので、両面中央に基部から溝を持ち、一見、銅鏃を思わせる造りである。

現在調査中の新富町七又木遺跡群にも同例が2点見られ、時期判断が可能かと思われたが、それぞれ弥生時代と古墳時代の遺構からの出土という事である。

## 第6節 まとめ

田代掘第1遺跡は掘立柱建物跡が主体遺構である為、調査面積の割に遺物を伴う遺構が少なく、また遺物包含層も耕作により攪乱を受けており、遺跡の全体像等を追及しようとしたとき、判断資料の不足感は拭えない。

これは4,000㎡という調査面積ながら、1遺跡の部分的様相を示す遺構の検出状況にもよるものであろう。

そのような中であって、前述のとおり状況のなかに、いま一つ活かしきれないジレンマも残るものの、出土した遺物には注目すべき物も多く、その資料的価値は救いである。

以下、確認された遺構、遺物について、時代毎にまとめてみる。

### 縄文時代

縄文時代については、明確な遺構の検出は無く、土器、石器のみの出土で、量的にもそう多くはない。

土器は、精製磨研土器、粗製土器、貝殻文土器に大別されるが、形式や、特徴をうかがい知ることのできるの第5図に掲載したもののみで、次のとおり分類される。

I類 精製磨研土器……………1・2・3

II類 粗製土器……………4・5・6・7・13

III類 貝殻文土器……………10・11・12・14

IV類 そ の 他……………8・9



Ⅱ類については少ないながらも当遺跡縄文土器の主体となるもので、松添貝塚<sup>(1)</sup>をはじめ、平畑<sup>(2)</sup>遺跡、赤松遺跡、下水流遺跡<sup>(3)</sup>等にⅠ類とともに類例がみられ、このうち2・3は、リボン状の張り付け突起を口縁部に持ち、県内ではⅠ類の一般的な突起形態であるが、1の俵状の突起については初見で、類例は、大分県上菅生B遺跡<sup>(4)</sup>に見られる。

この上菅生B遺跡については、赤松、下水流両遺跡報告書中においても平畑遺跡Ⅳ式とともに併行する時期にあげられており、本遺跡におけるⅠ・Ⅱ類もまたこの時期に組み込まれるものであろう。

Ⅲ類については量的にも少なく、小片で全体がとらえ難く、明確にしえないが、10～12と14については別系統のものと思われ、14については市来式の範疇でとらえられるものであろう。また、石器についてもその組成は、赤松・下水流遺跡に近似しており、近接する時期を窺わせる要因のひとつとなっている。

細石核については、野岳型細石核の範疇でとらえられるものと思われるが、細石核は現在までのところ、赤木、船野、岩土原、前原西、田上等、37カ所の遺跡からの出土が県内では知られており、前原西遺跡、田上遺跡に次いで本例は、同一丘陵上における3例目の出土で、今後この丘陵上における細石器文化の在り方については注目されるものがある。

以上、当遺跡における縄文期の遺物は、一部、草創期、後期を含みながらも主体としては晩期前半代に比定されるものである。

## 古墳時代

とえられた遺構は住居跡1軒で、遺物も住居跡内出土のものが主体である。

この住居跡の時期については、量的には少ないものの特徴的な出土土器（第10図）によりうかがい知ることができる。

甕は、破片を含め3点が出土しているが、全体の把握できる1を中心にみると、全体的には弥生式土器の特徴を持つものの、弱く外反する長い口辺部と胴部境に巡る凸帯や、脚を持たない平底の底部に、弥生時代終末期までの土器変化の流れより一歩進んだ変化を見出すことができ、さらに、供伴する土器をみても、2の高坏の脚部片は、胴部と裾部が区別されており、所謂古式土師器としてとらえられるものである。

現在、宮崎平野を中心とした弥生式～土師式土器にかかる編年案も数例示され<sup>(6)</sup>、この内もっとも新しくまた近接する「宮崎学園都市遺跡群出土土器を中心とした編年案」にあてはめれば、ⅠA期に比定できると思われるが、脚台状の底部張り出しを持つ甕の底部片も供伴しており、ⅠA期の中でも、この時期とされる前原南遺跡SA-9、熊野原遺跡SA-15に若干先行する可能性も感じさせる。

## 中 近 世

この時期の遺構には、掘立柱建物跡、溝状遺構、SC-1等があげられ、SC-1を除きこれに間接的に陶磁器類が伴う。

陶磁器類については、九州陶磁文化館、大橋康二氏に鑑定を御願ひしたところ次のように分類された。

### 鎌倉時代末～室町時代（14c～16c中）

舶載陶磁器	中国製	青磁、染付、明三彩
国産陶磁器	備前系	すり鉢
	常滑系	甕、壺
	東播系	こね鉢（SC-1出土）

### 江戸時代中期～幕末（17c末～19c末）

国産陶磁器	肥前系	染付、青磁、青磁染付、陶胎染付
	唐津系	陶器
	その他	壺、甕、染付、等

以上、中世と近世代に大きく分けられるわけであるが、直接遺構に伴うのはSC-1出土の東播系のこね鉢だけで、残りはほとんど掘立柱建物跡に対応させられるものと思われるものの、包含層の攪乱により、その分布状況からの遺構の特定には問題が残るようである。

また、掘立柱建物跡については、梁行1間のものと2間のものに2分されるが、宮崎学園都市遺跡群の、平畑、陣之内、前原南の各遺跡には1間のものは無く、堂地東では1棟のみ、前原北、熊野原A、B、Cの各遺跡ではその大半が1間のもの、という検出状況と併せ考えると、時間的、あるいは性格的に分類されるべきものかも知れない。

SC-2については本文中にも記したとおり出土遺物が無く、時期判断の材料としては、トレンチ状の掘込み群との切り合いだけである。

このトレンチ状の掘込み群については、おそらく近世の耕作物等の貯蔵穴と思われ、これに後出するものと思われるが、SC-2自体の性格については火の使用が認められる以外は推定材料が無い。

ただ、付近に鉄滓を埋土中に包含する掘込みも見られ、あるいはこれに関係するものかも知れない。

陶磁器類の内、注目されるものに明三彩片があげられ、上流階級者の存在が想定されるが、調査区内外に残る五輪塔を考え併せれば、明確な遺構はとらえられていないものの、調査区を含むこの付近に寺院の存在した可能性が高い。

明三彩を含む中世陶磁器の比定されたこの時期は1章にも記したとおり、伊東氏の台頭から没落期にあたるが、石塔数1,237基を数え、その大半に記年在銘の残る宮崎市生目の妙円寺石塔群

では、200年近く続いた石塔の建立が伊東氏没落を境に途絶える状況がとらえられている他、山内石塔群に於ても同じ様な状況が看取されており、寺院と伊東氏のかかわり合いや武士階級による石塔造立が想定されている。

これらの状況と本遺跡の中世遺物の在り方とあわせればなお、寺院跡の存在が強く窺われる訳であるが、文献等に記載は無い。

なお、妙円寺石塔群では、在銘中の人名から、門川流伊東氏の強いかわりが窺われているが、清武氏もまた同じ門川流の伊東氏族である。

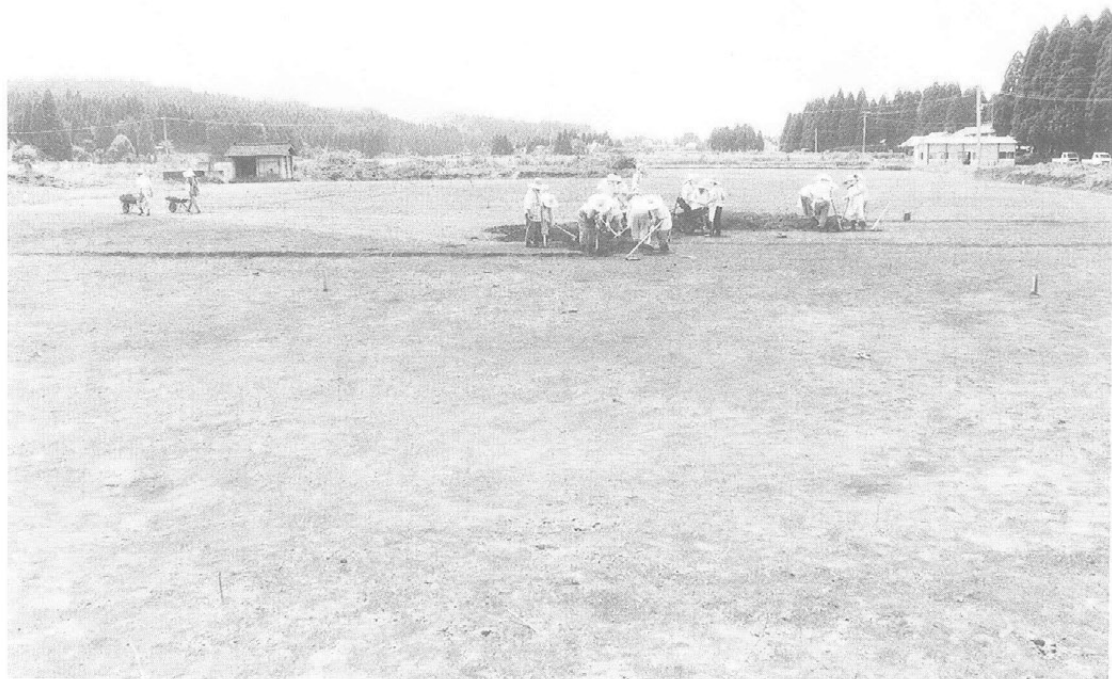
- |      |  |               |
|------|--|---------------|
| 註(1) | 松添貝塚 宮崎市文化財調査報告書 第2集 1977                | 宮崎市教育委員会      |
| (2)  | 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集 1985                 | 宮崎県教育委員会      |
| (3)  | 赤松遺跡 下水流遺跡 東郷町文化財調査報告書 第1集 1987          | 東郷町教育委員会      |
| (4)  | 赤れんが 第2号 1982                            | 赤れんが出版会       |
| (5)  | 宮崎県旧石器出土地名表 第10回九州旧石器文化研究会資料 1986        |               |
| (6)  | 宮崎平野における弥生土器編年試案—素描 (MK II) 宮崎考古第9号 1984 | 石川 悦雄         |
|      | 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年表 国富町文化財調査資料 1985      | 長津 宗重         |
| (7)  | 宮崎市の文化財                                  | 1988 宮崎市教育委員会 |
| (8)  | 山内石塔群 宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書 第1集 1984          | 宮崎県教育委員会      |



図版1 角上原遺跡群遠景(北から)



図版2 田代堀第1遺跡A地区全景(東から)



図版3 田代堀第1遺跡A地区調査風景



図版4 堅穴式住居跡(SA-1)検出状況



図版5 掘立柱建物跡（SB-1～6）検出状況



図版6 掘立柱建物跡（SB-7・8）検出状況



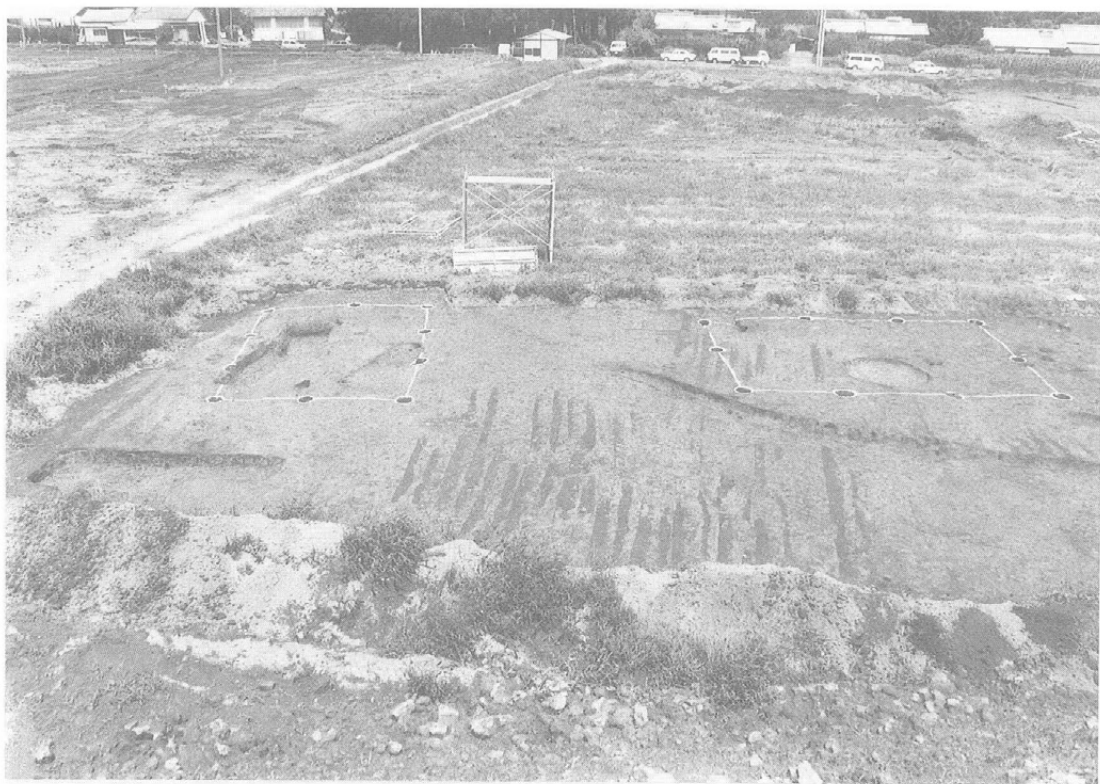
図版7 掘立柱建物跡（SB-9）検出状況



図版8 掘立柱建物跡（SB-10）検出状況



図版9 田代堀第1遺跡B地区全景（西から）



図版10 掘立柱建物跡（SB-11・12）検出状況

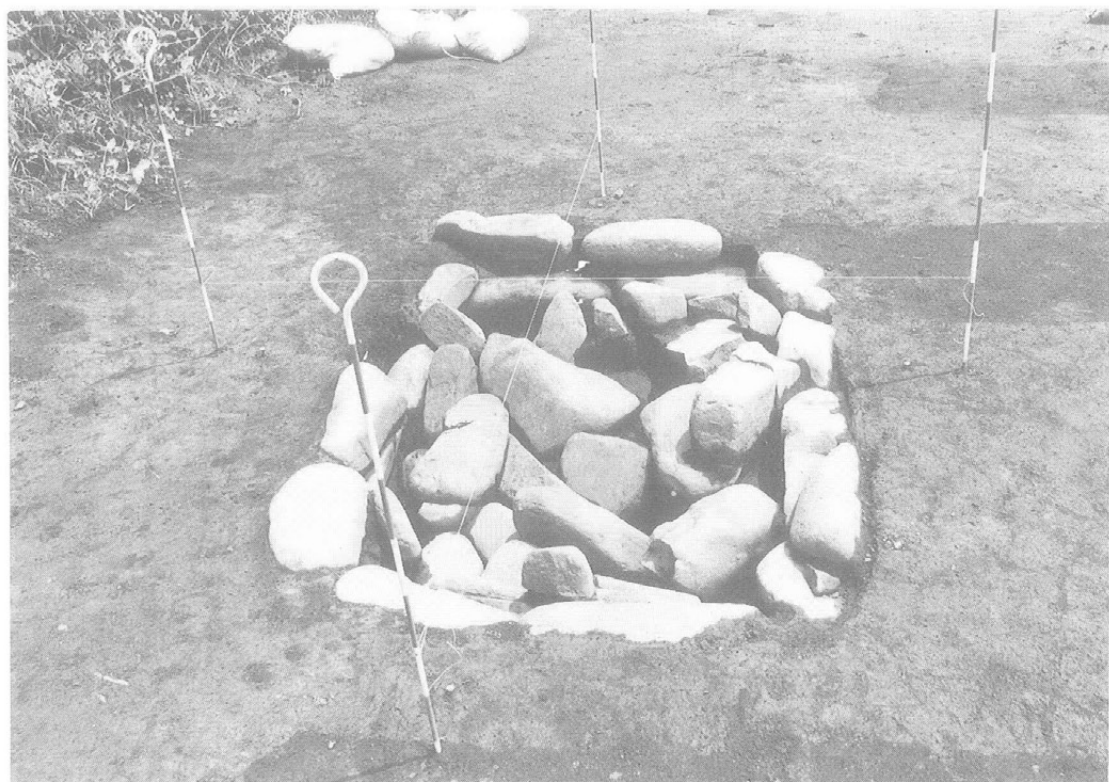




図版11 掘立柱建物跡（SB-13）検出状況



図版12 SC-1 検出状況



図版13 SC-2 検出状況



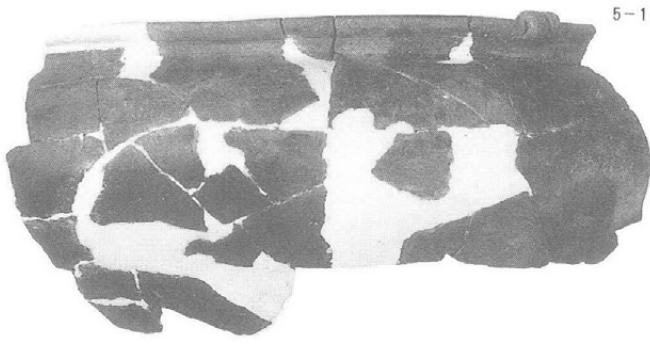
図版14 SC-2 内部礫除去状態



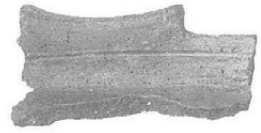
図版15 溝状遺構検出状況 (SE-1・4)



図版16 塚状遺構検出状況



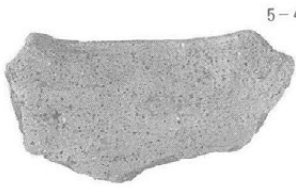
5-1



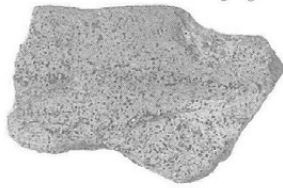
5-2



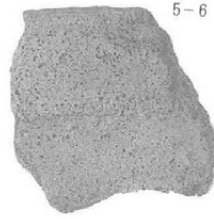
5-3



5-4



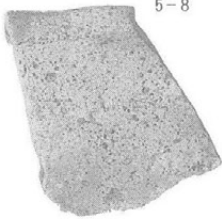
5-5



5-6



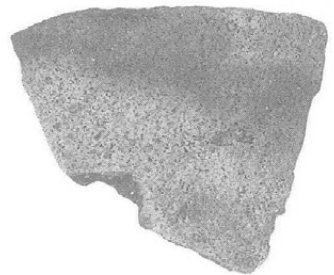
5-7



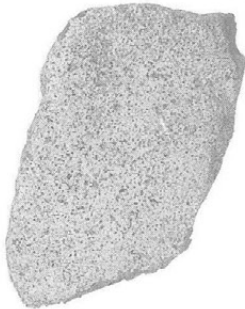
5-8



5-9



5-10



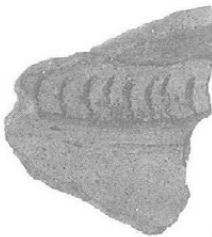
5-11



5-12

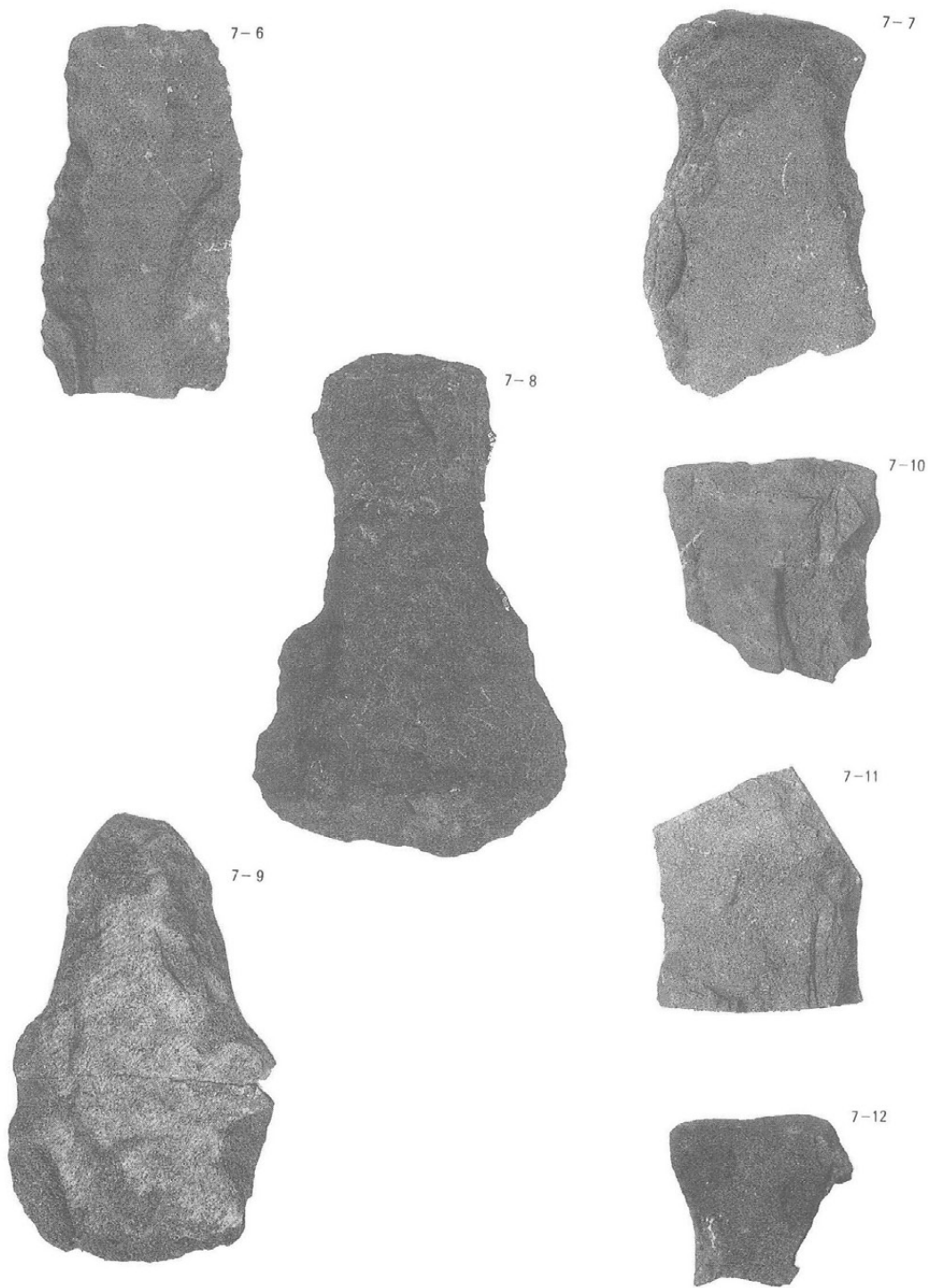


5-13

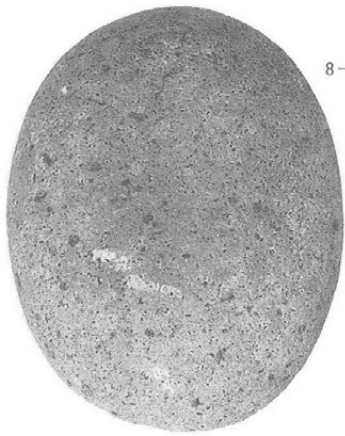


5-14

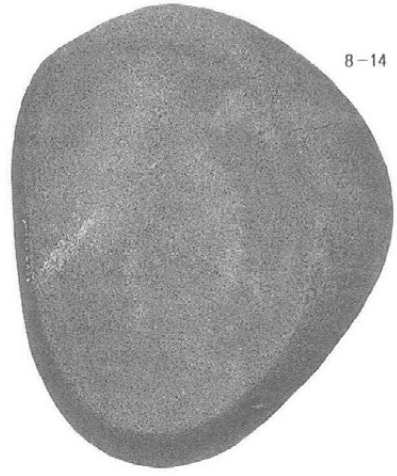
图版17 繩 文 式 土 器



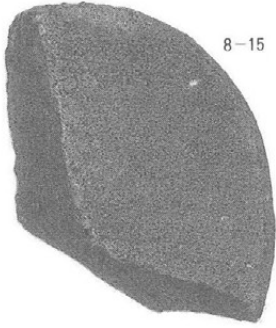
図版18 縄文時代打製石斧



8-13



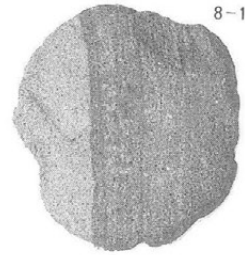
8-14



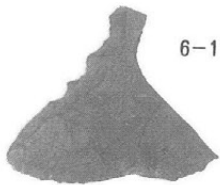
8-15



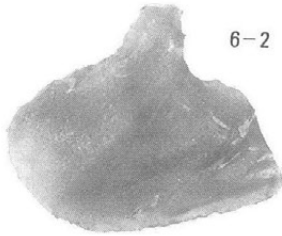
8-16



8-17



6-1



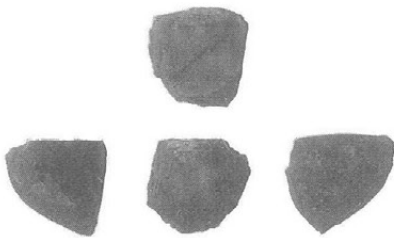
6-2



6-3



6-4



6-5



18-1



18-2



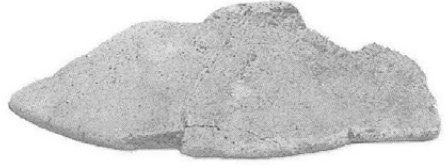
18-3

图版19 石 器 類

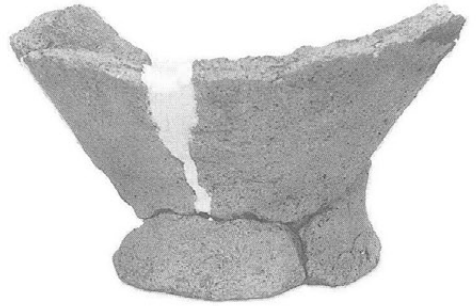
10-1



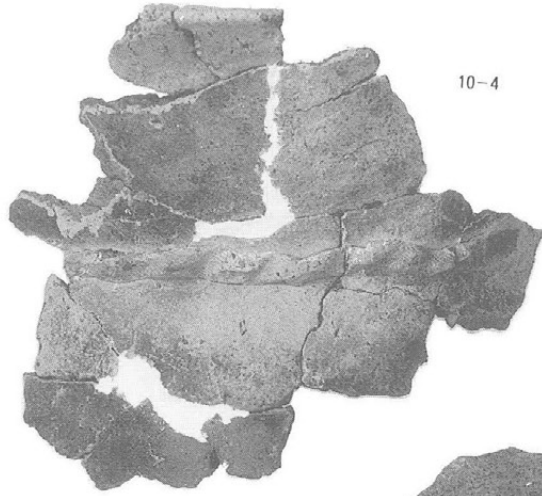
10-2



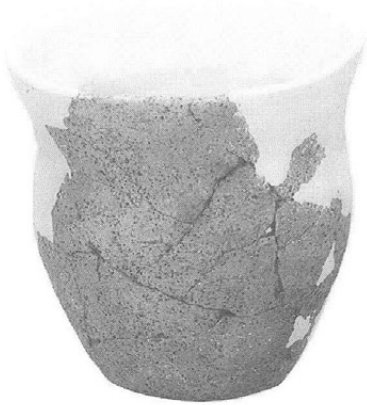
10-3



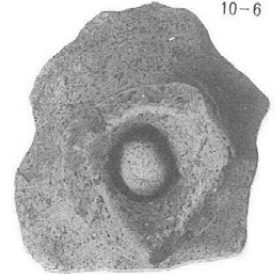
10-4



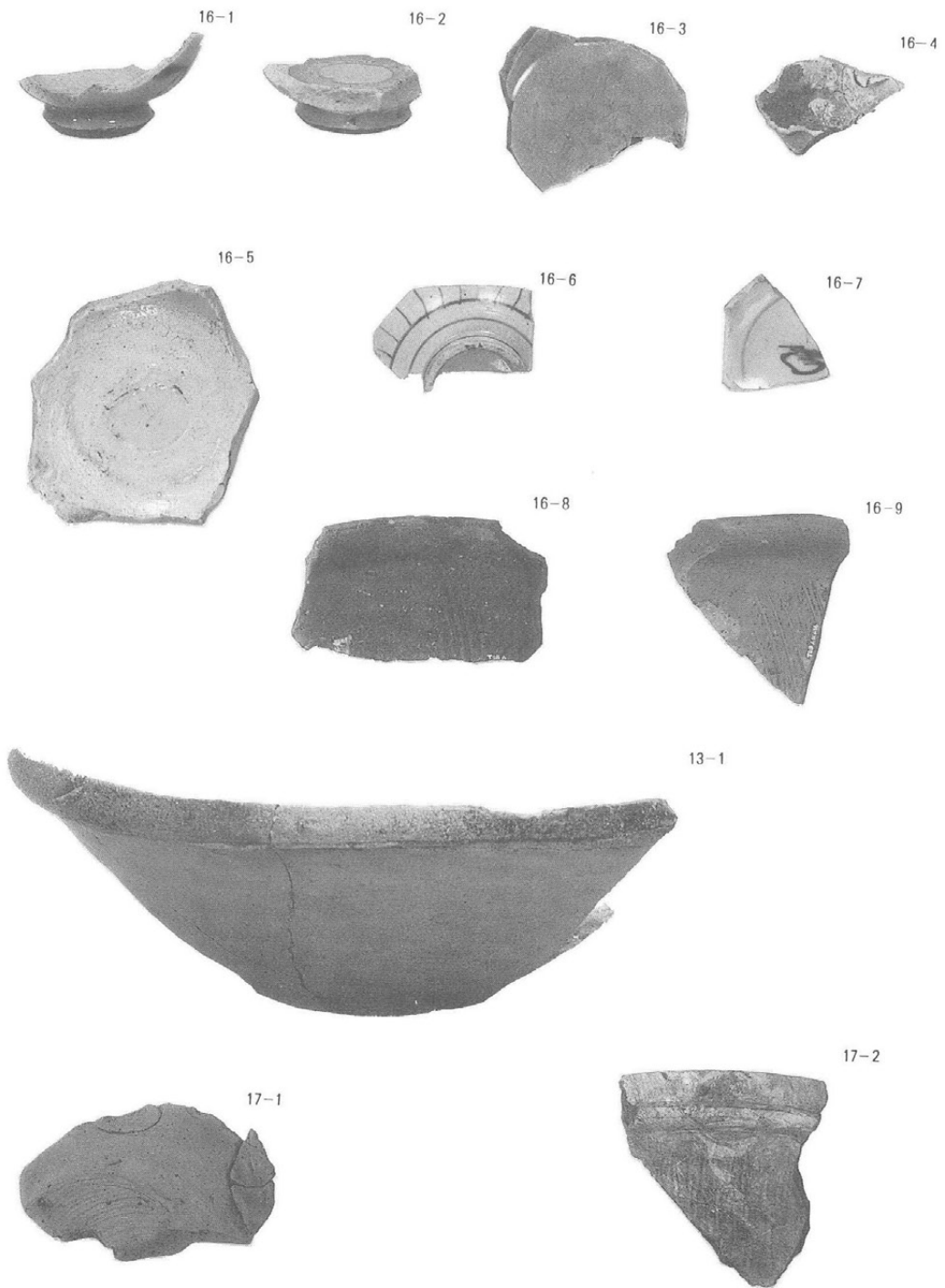
10-5



10-6



圖版20 土 師 式 土 器



图版21 中近世陶磁器類



## 第3章 上ノ原遺跡

### 第1節 調査区の概要（第2、21図、図版22）

上ノ原遺跡は角上原台地の西端にあたる。田代堀遺跡の立地する台地とは谷をひとつ隔てた位置関係にあり、東西約400m、南北約200mの小台地を形成している。昭和63年2月に実施した試掘調査では、柱穴や溝状遺構等の遺構が確認され、土師器片が少量出土した。また、アカホヤ層下位からは焼化した角礫が検出された。その結果、台地全体に縄文時代早期と中世の遺跡が所在が確認された。

今回の圃場整備事業では上ノ原地区については包含層には影響のない施工であるため、道路部分のみを調査区とした。調査区は台地の南西端に位置し、上ノ原遺跡のほぼ中心部の南側にあたる。南には谷が入り込み迫田となっている。調査区は幅5m、長さ70m、調査面積350㎡である。調査の結果、アカホヤ層下位で縄文時代早期の土器と焼礫が出土し、アカホヤ層上位から200を越える柱穴群や土壌等の遺構と縄文時代晩期の土器と石鏃や中世の陶磁器の遺物が出土した。また、表採品としてポイント1点と石鏃2点が出土している。

### 第2節 縄文時代の遺構と遺物

上ノ原遺跡は削平が著しく、耕作土下位の層序はアカホヤ火山灰層（2次堆積）—褐色土層—暗褐色土層—褐色土層となっている。

縄文時代の文化層としては、アカホヤ層下位の褐色土層下部から暗褐色土層上部にかけて早期の土器と焼礫群、アカホヤ層上位で晩期の土器と土壌を検出した。

#### 1. 縄文時代早期（第21～23図、図版25・26）

焼礫は、大きさが5～6cmから拳大程度の比較的小型の角礫や破碎礫で、調査区全面に散在する状態で検出された。遺構は2区で土壌（SC-3）1基が検出された。SC-3は長軸約110cm短軸約95cm、検出面からの深さ約17cmの楕円形の皿状土壌である。埋土中や土壌床面から焼土や炭化物は検出されなかった。SC-3は土壌周辺に焼礫の集中が見られることから集石遺構の掘り込みで、周辺の焼礫は集石遺構の廃棄礫と思われる。

遺物のうち土器は、塞ノ神式土器が見られる。1は凹線を帯状に巡らせた微隆起線文の上に連続連点文を施すタイプ。2・3・9は縄文を施すタイプで、そのうち3は突帯に刻み目を施している。5・10は口縁部が肥厚し、貝殻条線文を施すタイプ。4・7は凹線文を施すタイプで、7は口唇端部に刻み目を持つ。6・8は円形刺突文を施すタイプである。

石器は石鏃とポイントが見られる。いずれもチャート質の石材を素材とした石器で、表採品である。13はポイントで先端部をやや欠く。14・15はいずれも三角形式の石鏃で、14は基部に若干のえぐりをもつ。15はえぐりをもたないタイプである。

## 2. 縄文時代晩期（第21～23図・図版24・28）

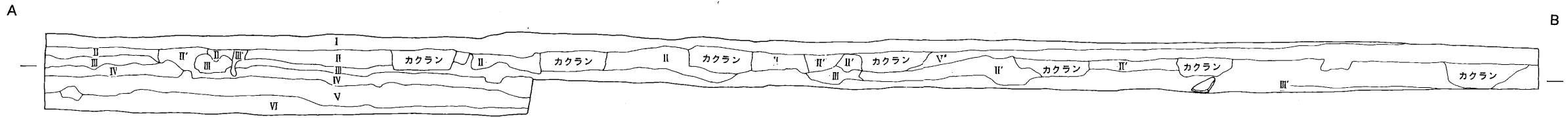
土壌は2基検出された。SC-1は4区で検出、規模は長軸約120cm、短軸約110cm、検出面からの深さ約20cmでほぼ円形の土壌である。床面より約10cm上部で磨石1点を出土、また、同レベルで部分的に焼土を確認した、SC-2は5区で検出された。プランが非常に不明瞭であるが南北2つの掘り込みからなる。北側の掘り込みは長軸約250cm、短軸約100cmの細長の掘り込みのなかに、さらに、確認面から約20cmの一段低いところに長軸約210cm、短軸約60cm、深さ約35cmの長形状の掘り込みをもつ土壌となっている。南側の掘り込みは長軸約20cm、短軸約120cm、確認面からの深さ約30cmの不定形の土壌である。両者の切り合い関係等については不明である。なお、北側の土壌を中心に、確認面から4～5cmの深さで土器が5点が出土した。

遺物は無文の張り付け突帯をもつ晩期後半の土器（11・12）と黒色磨研土器の胴部片が見られる。

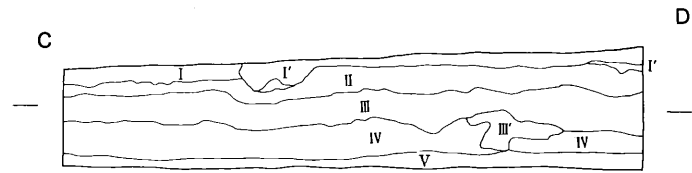
## 第3節 中近世の遺構と遺物（第21図・図版23・28）

柱穴は総数220本検出されたが建物跡を復元できるまでには至らなかった。柱穴の分布は調査区全域で見られるが、特に、3区から6区にかけて多く分布しており、2区での分布が疎である。柱穴の規模は、直径が20～30cmのものが主体をなしており、確認面がアカホヤ層であり柱穴上部がかなり削平されての検出であったため、確認面からの深さも30～40cm程度のものが多くみられる。

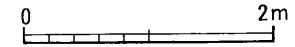
遺物は輸入磁器・国産陶磁器・土師器等の土器類が見られる。16・17は中国製の青磁碗の口縁部片である。16はへら描蓮弁文青磁、17は剣先蓮弁文青磁でいずれも15世紀のものと思われる。18は15世紀～16世紀にかけての中国製粗製青磁碗で、高台から底部にかけては無釉である。底部内面に「衣？」の墨書が見られる。19は中国製染付皿で15世紀末～16世紀にかけてのものである。20は16世紀末から17世紀前半（1630年代）にかけての肥前唐津系陶器である。21は18世紀中頃から末にかけての肥前系青磁染付碗である。22は糸切り底の土師器皿である。



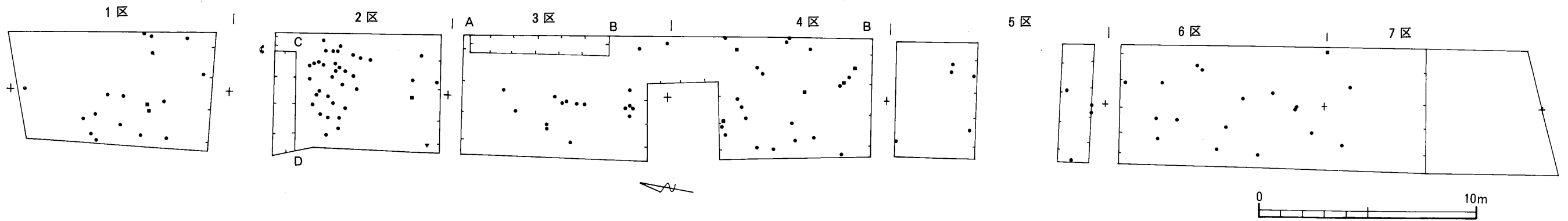
- I.....耕作土 褐色土、サラサラして粘性小。
- II.....褐色土 風積アカホヤブロック多い。
- III.....灰褐色土 上層にアカホヤ細粒を含む。
- IV.....暗褐色土 かたくしまったやや粘性のある層。
- V....." IV層より暗い、かたくしまり、粒子が細かい。
- VI....." V層よりやや明るい、V層よりやわらかい。
- VII.....褐色土 粒子こまかくサラサラしている。
- II'.....橙褐色土 サラサラして粒子が大きい。赤ホヤブロックを含まない。



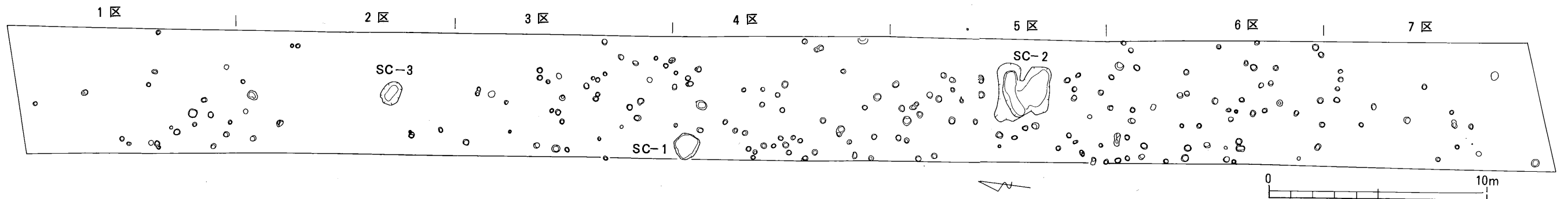
- I.....橙明褐色土 粘性ほとんどなく、サラサラしている（二次的アカホヤ）
- I'....." 純粹たアカホヤが混入している。
- II.....褐色土 やや粘性の褐色土が雲状に混り、しまっている。
- III.....暗褐色土 粘性があって、かたくしまっている。全面一様に暗褐色を呈す。
- III'.....褐色土 やや緻密で粘性大、明褐色土が雲状に入る。
- IV.....褐色土 色調はII層とIII層の中間、暗い褐色、粘性大・III層よりやわらかい。
- V.....明褐色粘土 粒子が極めて細かい、粘性、極めて大である。俗に瓦土といわれるもの



第19図 土層断面図



第20図 遺物分布図



第21図 遺構分布図

## 第4節 まとめ

上ノ原遺跡の今回の調査は、縄文時代早期・晩期と中世の多くの遺構・遺物が検出された。しかし、調査区が幅5mの道路幅内での調査であったため、今回の調査資料だけでは各時代の詳細について明確にできなかった。

縄文時代早期の文化層では、焼礫群の礫の分布がかなり疎であったが部分的に礫の密集も見られ近くに掘り込みも確認されており集石遺構が予想される。試掘調査でも礫の分布が疎であったため早期の文化層の有無が懸念されていたが遺跡全域への集石遺構の分布も十分考えられる。

縄文時代晩期の文化層についてはアカホヤ層面での確認であるため中世遺構との混乱も考えられる。しかし埋土の状態から、2基の土壇（SC-1、SC-2）については晩期の時期と思われる。

中世の文化層については、わずか350㎡の調査面積のなかで220本もの柱穴群が検出されたことから、建物跡が確認されなかったものの、調査区の北側および東側にかなり大規模な中世遺跡の広がりが予測される。

今回の調査区は上ノ原遺跡でも西端に分布しており遺跡の広がりは北及び東側に広がると思われる。さらに、谷を隔てて東方に位置する田代掘遺跡でも上ノ原遺跡と同時期にあたる縄文時代晩期、及び中世の文化層が検出されており、角上原遺跡群全域にこれらの時期や縄文時代前期の遺跡が広がると思われる。

宮崎県教育委員会「角上原地区遺跡」『昭和62年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概報』1987

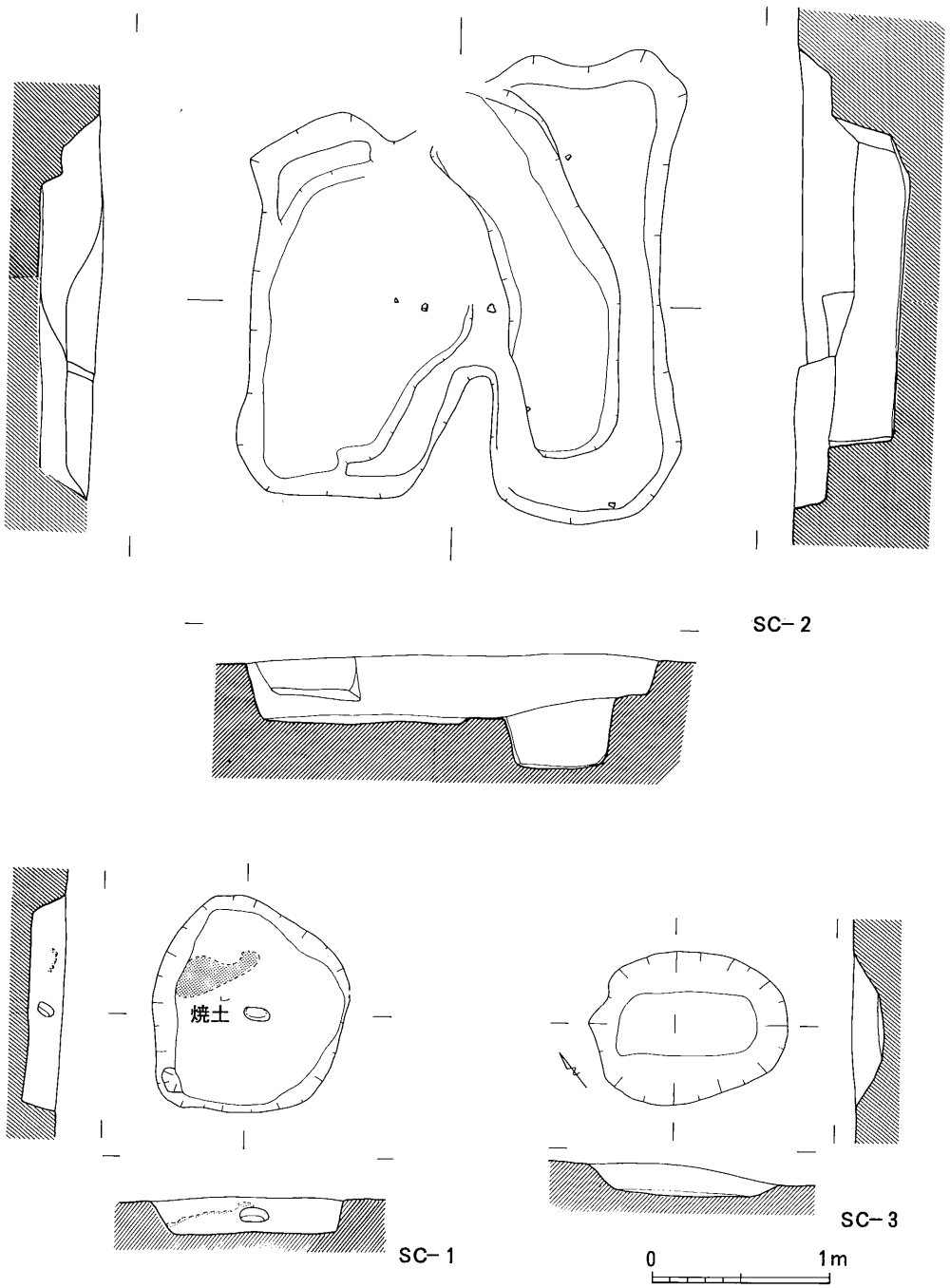
図面 番号	遺物 番号	種 類	大 き さ (cm)			重 さ (g)	石 材	備 考
			長 軸	短 軸	厚 さ			
23	13	ポイント	8.26	3.20	1.35	35.6	チャート	先端部欠損
〃	14	石 鏃	2.32	1.21	0.55	1.1	チャート	先端角度約25°
〃	15	石 鏃	2.17	1.45	0.42	1.2	チャート	〃 約35°

第2表 石 器 観 察 表

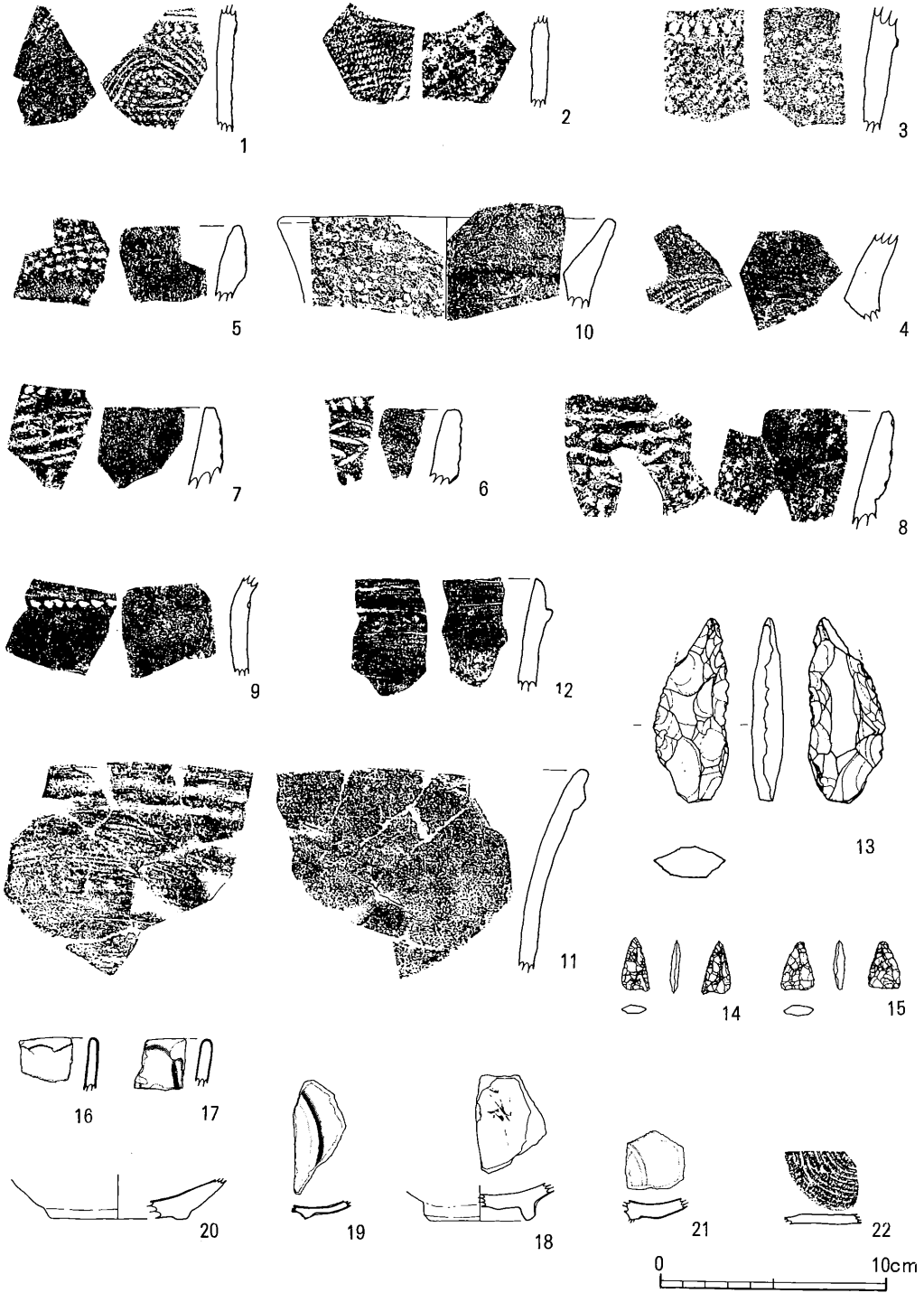
図面 番号	遺物 番号	器種	器部	文様および調整		胎	土	色		調		焼成	備考
				外	内			外	内	外	内		
23	1	鉢	胴部	沈線、刺突文	ナデ	1mm前後の白、うす茶の粒 長石を含む	にぶい黄橙 (10Y R 6/3)	にぶい黄橙 (10Y R 6/4)	にぶい黄橙 (10Y R 6/4)	良好			
"	2	"	"	縄文	ヨコナデ	1mm~3mmの白っぽい粒、灰色 がかかった粒を多く含む、石英含む	にぶい黄橙 (10Y R 6/3)	にぶい黄橙 (7.5 Y R 6/6)	良好				
"	3	"	"	縄文	—	1~2mmの白い粒 金雲母を含む	にぶい黄橙 (10Y R 7/4)	にぶい黄橙 (10Y R 7/4)	良好				
"	4	"	"	ヨコナデ、刺突文	ヨコナデ	白黒、うす茶の細砂粒 透明に光る細粒を含む	にぶい黄橙 (10Y R 7/4)	にぶい黄橙 (10Y R 7/4)	良好				
"	5	"	口縁部	貝殻条痕文	ナデ	石英、角閃石、白い細粒を含む	にぶい黄橙 (10Y R 7/3)	にぶい黄橙 (10Y R 6/3)	良好				
"	6	"	"	沈線、刺突文	ナデ	1~2mmのうすい茶、白い粒 を含む	にぶい黄橙 (7.5 Y R 5/4)	にぶい黄橙 (7.5 Y R 6/4)	良好				
"	7	"	"	沈線	ヨコナデ	白、うす茶の細砂粒、金雲母石 を含む	にぶい黄橙 (7.5 Y R 6/4)	にぶい黄橙 (7.5 Y R 6/6)	良好				
"	8	"	"	刺突文	ヨコナデ	1~2mmの白、うす茶の粒、金 雲母、不透明な白い粒を含む	にぶい黄橙 (7.5 Y R 6/6)	にぶい黄橙 (7.5 Y R 6/4)	良好				
"	9	"	胴部	刺突文	ヨコナデ	白、こげ茶の細砂粒、石英を含む	灰褐 (7.5 Y R 4/2)	にぶい黄橙 (10Y R 7/3)	良好				
"	10	"	"	刺突文	ヨコナデ	白、黒、うす茶の細砂粒 透明に光る細粒を含む	にぶい黄橙 (10Y R 7/4)	にぶい黄橙 (10Y R 7/4)	良好				
"	11	"	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	1~2mmの灰、うす茶、白い半 透明の粒を含む	浅黄橙 (10Y R 8/4)	浅黄橙 (10Y R 8/4)	良好				
"	12	"	"	ヨコナデ	ヨコナデ	1~3mmのうす茶、白の粒を含む	にぶい黄橙 (10Y R 7/3)	にぶい黄橙 (10Y R 7/4)	良好				

図面 番号	遺物 番号	遺構名	品種	器形	部位	法量 (cm)	色調		形態・成形技法の特徴	備考
							色	調		
23	16	—	青磁碗	口縁部	口縁部	—	釉調はやわらかい青 味を帯びる	へう描述弁文、内面は全体に貫入がある		
"	17	—	青磁碗	口縁部	口縁部	—	釉調は青味がつよい	剣先連弁文、内面は全体に貫入がある		
"	18	—	青磁碗	底部	底部	推定底径4.4	釉調はやわらかい青 味を帯びる	内面はヨコナデで無釉、「衣」?の墨書あり 高台内部はヨコナデで無釉、高台部も無釉、外側に一部釉が流れる		
"	19	—	染付皿	底部	底部	—	白色	高台部は無釉		
"	20	—	—	底部	底部	推定底径6.0	にぶい橙	内面は施釉、外面は一部釉がかかる。高台内部は無釉		
"	21	—	青磁染付碗	底部	底部	—	釉調はうすい青色			

図面 番号	遺物 番号	遺構物	器種	器形	部位	法量 (cm)		色調		胎	焼成	調整		備考
						口径	底径	高	内			外	内	
23	22	—	土師皿	底部	底部	—	—	—	浅黄橙 (10Y R 8/3)	灰色の細砂粒を含む	良好	ヨコナデ	—	糸切り底



第22図 遺 構 実 測 図



第23図 出土遺物実測図及び拓影



図版22 上ノ原遺跡調査区全景（南から）



図版23 柱穴検出状況（5・6区）





図版24 S C - 1 検出状況



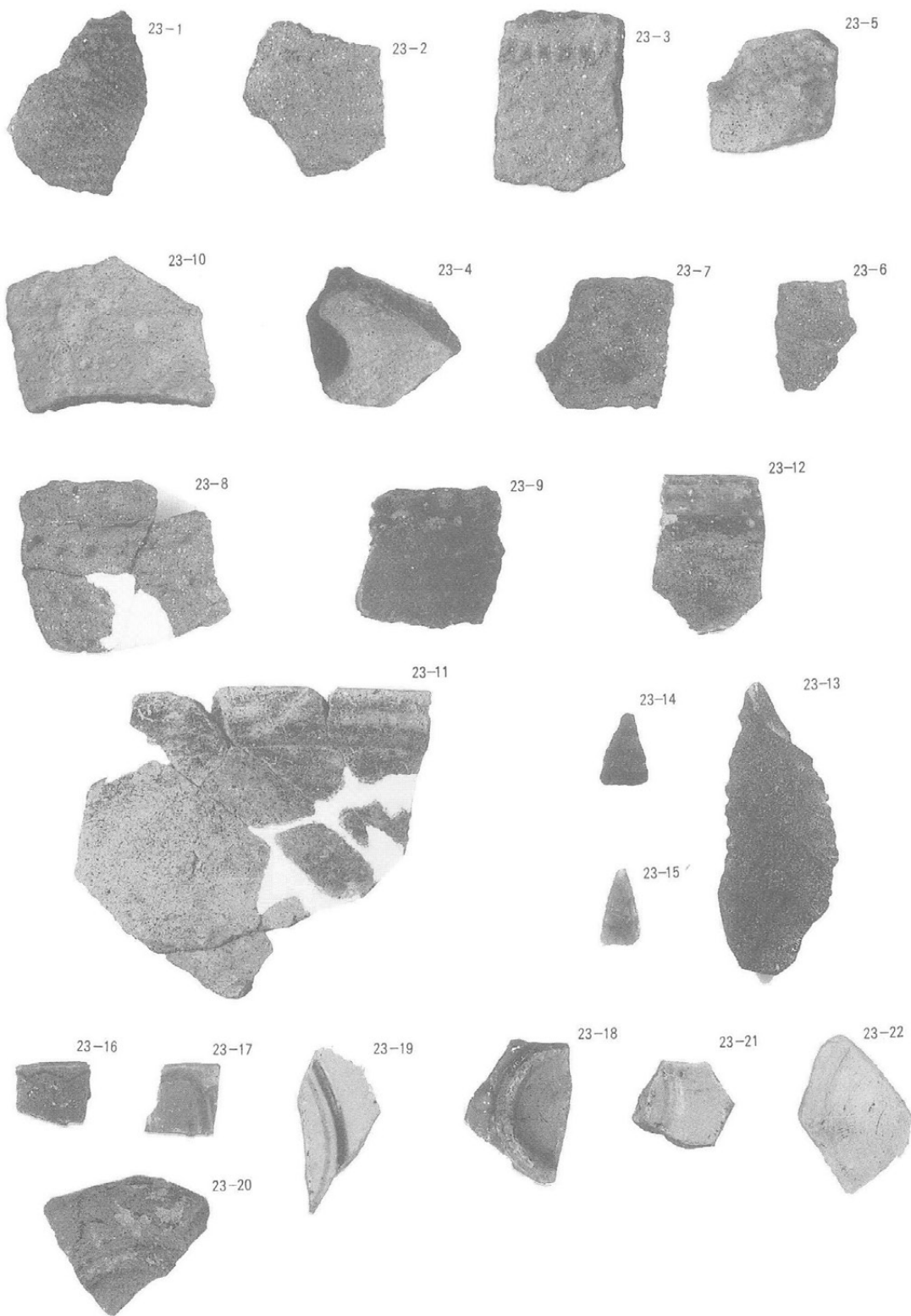
図版25 調査区全景（縄文早期文化層 北から）



図版26 縄文早期遺物出土状況（2区）



図版27 土層推積状況（3区南壁）



图版28 出土遗物

# 角 上 原 遺 跡 群

清武町埋蔵文化財調査報告書第3集

發 行 平 成 元 年 3 月  
年 月 日

發 行 清 武 町 教 育 委 員 会

印 刷 (株) 宮 崎 南 印 刷

